さっぽろまちづくりトーク

～新たなまちづくり計画の策定に向けて～

～ 開催の記録 ～

日　時	平成 15 年 11 月 25 日（火） 午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分
会　場	ホテルポールスター札幌 ポールスターホール
主　催	札　幌　市

■目　次

■市長からのメッセージ　3

『元気な札幌をつくろう！ ～そのための５つの基本目標～』
札幌市長　上田　文雄

■座　談　会　7

『「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」のまちづくり！』
進行・座談者　安田　睦子氏（(有) インタラクション研究所代表）
座　談　者　宮脇　　淳氏（北海道大学大学院法学研究科教授）
座　談　者　鶴羽　佳子氏（フリーキャスター）
座　談　者　上田　文雄　（札幌市長）

■来場の方々との意見交換　23

■資　料　33

・プログラム
・さっぽろまちづくりトーク参加応募に際し、寄せられた意見

●○●はじめに●○●

○司　会：　本日はお忙しい中、ご来場いただきましてまことにありがとうございます。私は、札幌市企画調整局企画部企画課長をしております本間と申します。僭越ではございますが、本日の司会をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

札幌市では現在、今後のまちづくりの考え方や重点的に進めるべき施策、事業などを定める「札幌新まちづくり計画」を策定することとしており、このさっぽろまちづくりトークも、今後のまちづくりについて市民の皆様と一緒に考えていくためのものとして開催するものです。

本日は、まず市長からのメッセージ、そして座談会、来場の皆様との意見交換と進めてまいる予定となっております。

なお、会場に携帯電話をお持ちの方がいらっしゃいましたら、恐れ入りますが、電源をお切りくださいますようご協力お願い申し上げます。

また、本日のさっぽろまちづくりトークの模様は、記録のために、録音、写真撮影を行っております。今後のこの記録は札幌市の発行物やホームページで公開することもございますので、よろしくお願いいたします。

それではまず、上田文雄札幌市長から市民の皆様へのメッセージで始めさせていただきたいと思います。

上田市長、お願いいたします。

市長からのメッセージ

『元気な札幌をつくろう！～そのための５つの基本目標～』

札幌市長　上田 文雄

皆様、こんばんは。本当にお疲れのところ、この「さっぽろまちづくりトーク」にお集まりいただきましてありがとうございます。経済成長の時代から、どんなに頑張っても現状維持とか、わずかな成長しか望めないという社会状況、また地方自治から見れば、中央集権から本格的な地方分権の時代へと入ってまいりました。

これは民主主義の観点からいえば、当然歓迎すべきことですが、その実践を私たちが日々これからしていかなければならない、こういう時代状況の変わり目に今あると思います。経済的には低成長の時代、そして政治的には民主主義、市民自治といったものが本当に問われていく、そういう時代の転換期だと思っているところであります。

本日こうして皆様方にお集まりいただいて、これからの札幌のまちづくりということをテーマに皆さん方と一緒に議論をしていきたいと思うのは、こういう時代において私たち自身がどう変わっていかなければならないのかということについて、共通の理解、共通の認識といったものを持った上で、さあ、どういうふうに僕たち羽ばたこうかと、こんなことが元気に話ができれば大変うれしいなと思っているところでございます。

私は、この６月に札幌市長に当選、就任させていただきまして、７月の議会において「さっぽろ元気ビジョン」という施政方針を出しました。議会にも報告をさせていただいて、そして皆さん方のご批判をちょうだいしたいと思っているところであります。

この施政方針の目玉といいますか、キャッチとなるものは何なのかといいますと、これは私の標語でいうと、「市民の力がみなぎる文化と誇りあふれる街」をつくりたい、そういうことを目標にしていきたいと思ったわけであります。この「市民の力がみなぎる文化と誇りあふ

れる街」というこの一言一言にそれなりの意味を込めているわけですが、「市民の力がみなぎる」というのは市民自治ということ。まちには人が集まってくる。人が集まるとそこに社会が形成されるわけであります。社会が形成されますと、そこのルールがあり、あるいは文化がそこに生まれる。人々は必ず自分を表現したい、自分を実現したいと、このように思うわけであります。それを「自己実現」と言うことができるかと思いますが、中でも都会に人がたくさん集まっているというその中において私は、人々というのは、さまざまな形で人々との兼ね合い、距離というものをはかりながら、表現したい、実現したいと、このように思うはずだと思うのです。そこで生き生きとした生き方ができるかどうかというのは、まさに自己実現ができているかどうか。自分のことは自分できっちり決めていくことができるか。人から当てがいぶちでもらったもの、与えられたものではなくて、みずからが自分の生きたいように生きる、そして人と協働しながら、みずからのよりよい生活環境というものをつくっていく。そんなことがのびのびとできる社会が私は一番健全な社会であると、そして元気の出る社会であると、このように思っているわけです。

「文化と誇り」というのも、まさにそのことを申し上げているわけでして、人々の表現活動といったものが、必ずそこでは定量にあって、それがぶつかり合い、調和をし、そして一つのその地域における文化といったものができ上がってくるのだと。それを大事に思う、そのことに、その土地の、あるいは団体、人々の集まり、社会に、みずからが文化を形成する担い手であると認識できたときに、他とは違う誇りといったものが生まれるのだと思います。市民の力みなぎる文化と誇りあふれる街というものがこれからの社会において大事にされなければならない。そして私は、こういうことを目標にまちづくりをしていきたいと、このように皆様方に訴えさせていただいているところであります。

このまちづくりの目標といったものを実現するために、私は三つのプランをつくりました。それは、「市民自治推進のプラン」「まちづくりのプラン」「市役所改革のプラン」と、この三つであります。この三つのプランづくりと実践を通じて、私は市民の力みなぎる文化と誇りあふれる街というものをつくっていく、その目標を実現していきたいと思っているわけであります。

この施政方針に定めたまちづくりの方向を実行していくために、現在、今後の中期的なまちづくりの考え方、あるいは重点的に進めるべき施策などを定める「札幌新まちづくり計画」の策定に着手をしているところです。この「札幌新まちづくり計画」というのは、平成16年度から18年度までの3年間を計画期間と定めて、まちづくりの理念だとか指針を示す「ビジョン編」と札幌市がこの3年間に重点に進める事業といったものを掲載する「重点事業編」の2編の構成といたしました。ビジョン編については来年の3月ぐらいまでに皆様方に公表させていただく。そして重点事業編については、来年の8月までをめどにして、これを公表し、皆様に発表させていただきたいと思っているところであります。

この新しいまちづくりの計画を策定するために、「札幌新まちづくり計画市民会議」をこの11月6日に立ち上げました。今日こうやって皆さん方とまちづくりトークという会を持って、皆様方のさまざまなご意見をちょうだいしながら、市民議論といったものを踏まえて、この札幌新まちづくり計画を策定していきたいと考えているところであります。

札幌は、近郊が極めて豊かな自然に恵まれているという土地柄でございます。その一方でまちなかには、これまでの先人の先輩たちが一生懸命努力をして、着実な都市機能、都市基盤といったものを整備してまいったわけでありまして、大都会としての都市機能が蓄積されております。このようなことから、多くの市民がこの

まちが好きだ、自然があり、しかも便利だと感じて、何度アンケートをとっても、97％とか95％ぐらいの市民の方が、「このまちにずっと住んでいたい」「離れたくない」、このように言われるように、非常に好かれている、愛されているまちだと言われているわけです。これは札幌のまちづくりということに今までいろいろ知恵を出して汗をかいてきた、多くの諸先輩の努力のたまものだと、このように私は思うのであります。

そして今、地方分権という中にあって、これからのまちづくりをしていくときに、本当に私たちがこのまちづくりに参加することができるか、どう参加をしていくかということが、今問われているという思いを持つわけであります。

今後のまちづくりについて、施政方針の中で私は、五つの基本目標を定立させていただきました。それは、「元気な経済が生まれて、安心して働ける街」にしようじゃないかというのが一つであります。二つ目は、「健やかに暮らせる共生の街」。ともに一緒に生存する街という意味で共生の街であります。三つ目は、「世界に誇れる環境の街」。とにかく今環境が地球規模で、今からやったのではもうＣＯ$_2$対策遅いんじゃないか、手おくれだという学者もいるほど、非常に大変な状況にあるということを共通の認識にしながら、我々１人１人が何ができるか、何をしなければならないのかということをしっかり認識をし、また市政の中でもそのことを前面に出した市政をやっていこうじゃないかというものです。四つ目は、「芸術・文化・スポーツを発信する街」。物の豊かさもさることながら、芸術・文化・スポーツ、そういう心の豊かさ、こういったものを世界に発信できる、そんな街、そんなことを思うわけであります。五つ目は、「豊かな心と創造性あふれる人を育む街」。次世代の子供たちがすくすくと育まれる、そんな街をつくっていきたい。この五つを基本目標にいたしました。そして、安心して働けるまちという第一番目に掲げましたこの具体的な施策ということとして、中小企業や創業・起業、みずから事業を起こすという、創業・起業に挑戦する市民へのきめ細かな支援。あるいは魅力あふれる地域づくりの推進。芸術・文化の薫る街の実現など17の施策を立てて、これを重点化をして図っていこうという考えを示しているところです。

札幌を取り巻く状況を見ると、長引く景気の低迷の影響など、市税の収入というものはどんどん減少していくということになります。依然として厳しい経済状況が続いていると思いますし、今後もそう好転するとはなかなか見込まれない。そういう中にあって、予算上の歳入が頭打ちになる、あるいは減少していくと。その一方で歳出については、扶助費といいまして、生活保護費だとか、あるいは借金をして債権を発行する。その債権を償還していくための費用、借金払いに使う公債費というものがあります。この割合がどんどん大きくなって、義務的経費がかさんでくるということになりますので極めて厳しい。あれもやりたい、これもやりたいと思うことはたくさんあれど、自由裁量的に使うことができるお金がどんどん少なくなっていくという状況になることが見込まれているわけです。

国においても、来年度の予算が実質的に前年度以下の水準へということが、もう既定方針になっているようであります。そして、三位一体の改革として、地方に対する補助金だとか地方交付税だとか、そういうものが税源移譲（税金をとる権限を移譲する）の範囲が不明確なまま、どんどんどんどん削られていくということになりますと、地方のお台所というのが本当に寂しくなる、厳しくなるということになるわけであります。その一方で少子高齢化社会、そして地球環境問題への対応など重い課題にいつも対応しなければならないという時代が来ているわけであります。

このような時代の転換期、経済的・社会環境的な変革の時代、そして政治的にも転換期にあ

るという状況の中で、どのように市民の方々に安定した行政サービス、公共サービスを提供していけるのかということが、極めて厳しい、難しい選択を迫られるということになるかと思います。

ただ、こういう時代の転換期だからこそ、市役所というのは、市民の皆さんとともに考え、そしてともに悩み、そしてともに行動することが極めて重要になってくるのだと思います。そして、その心は何かというと、それは「市民自治」であります。そして、自分のことは自分でやる、自分たちのことは自分たちでやる、自分たちのまちのことは自分たちで決めていく、そして自分たちも公共サービスを担っていく、そういう元気さを持っていかなければ、私はこの社会がもっていかないと思っているわけです。

そして、札幌市の市民と市役所の職員の関係といったものも、市役所改革を今しようという中で、信頼関係ができ上がらず、公共的なものは税金を払っているのだからお役所がやってくださいという形のスタイルが続くならば、幾らお金があっても市民的な満足を得られるような公共サービスは提供できないだろうと思っています。市役所というのは、市民の役に立つところ、と書くように、やはり市民と市役所、行政というものが、これこそ私の政府である、私の行政執行機関であるという信頼関係を生む、そういう努力を市役所の職員も意識改革の中でやっていかなければいけないと思うのです。そこで信頼関係ができれば、行政のやろうとする公共サービスが市民にとって極めて限られたものしかできないということであっても、それを覆い包み込んで市民がともに行動していただけるということが起こるわけです。私は市民と市役所のよりよい関係を築くことによって、少ない予算で私たちの望む社会というものができてくると確信をしています。

そのためには市民同士が、あるいは市民と市役所の職員が対話と行動を通じて札幌のまちづくり、地域のまちづくりにお互いに関心を持ち、そのことを通じて自分のまちに誇りを持てるような、そんなまちにしていくことが大事だと考えているところでございます。

以上で私のメッセージとさせていただきます。ありがとうございました。

座　談　会

『「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」のまちづくり！』

進行・座談者　安田　睦子氏（(有) インタラクション研究所代表）
座　談　者　宮脇　　淳氏（北海道大学大学院法学研究科教授）
座　談　者　鶴羽　佳子氏（フリーキャスター）
座　談　者　上田　文雄　（札幌市長）

座　談　会

『「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」のまちづくり！』

○司　会：　それでは、座談会を始めさせていただきます。

座談会に先立ちまして、座談者の皆様をご紹介いたします。

まず､進行役もあわせて務めていただきます有限会社インタラクション研究所代表の安田睦子様でございます。

安田様は､｢広域のまちづくり｣｢市民と行政の協働｣などをテーマとする社会調査及び地域計画を専門とされており、これまでいろいろなボランティア活動にも取り組んでおられます。

続きまして、北海道大学法学部法学研究科教授の宮脇淳先生でございます。

宮脇先生は、行政学、財政学、政策論を専門とされており、経済企画庁、参議院予算委員会などのご勤務を経て、現在、内閣府参与、北海道庁政策評価委員会会長なども務めていらっしゃいます。

続きまして、フリーキャスターの鶴羽佳子様でございます。

鶴羽様は、ＮＨＫ｢おはよう北海道土曜版｣にキャスターとして出演されており、北海道の生涯学習審議会委員なども務めていらっしゃいます。

最後に、上田文雄札幌市長でございます。

座談会のテーマは『｢あれもこれも｣ではなく｢あれかこれか｣のまちづくり！』です。

それでは、よろしくお願いいたします。

身近なものから行政サービスに気づく

○安　田：　皆さん、こんばんは。進行役兼パネラーの安田です。よろしくお願いいたします。

これからはこちらの４人で進めさせていただきたいと思います。今日は「あれもこれも」ではなく、「あれかこれか」です。この「も」と「か」の違いは結構大きな話になってくるかと思います。でも私たちの生活はそれほど変わらず、余り行政というのを意識しないで毎日暮らしているわけです。それで何かのときに、「あっ、これは市役所があるからできていることなのだ」とか、「困ったからちょっと区役所に行こう」とか、そういうことに気づくわけです。ここで皆さんの自己紹介を兼ねて、生活の中で行政とのかかわりに気づいたとか、意識したというお話を一言ずつお伺いしたいと思います。

安田 睦子氏（(有) インタラクション研究所代表）――

札幌市生まれ。1996年北海道大学大学院経済学研究科修士課程修了。（社）北海道開発問題研究調査会客員研究員、（株）地域開発研究所取締役社会調査室長を経て、2002年（有）インタラクション研究所代表。「広域のまちづくり」「市民と行政の協働」などをテーマとする社会調査及び地域計画を専門とする。ボランティア活動に取り組むとともに、札幌市男女共同参画審議会委員などを務める。

まず、皆さんよくご存じの鶴羽さん、いかがでしょうか。そういうご経験ありますか。

○鶴　羽：　鶴羽佳子と申します。よろしくお願いいたします。

私は、３年前から道の生涯学習の講師を担当しており、年に30回近く研修や講演をしています。一番多くオーダーが来るのが、新入社員や学生さんに対しての社会人としてのマナーや挨拶をきちんとさせてほしいというものです。これは世代や職業も問わずにオーダーが一番来ます。一番担当してこんなに難しいんだと思ったのが、笑ってくださいと言ってもなかなか笑ってくださらないことです。簡単な人としてという部分なのですが、今はすべての場合において、そういった人材教育の必要性を感じております。そういう場が環境としてもあるべきなのではないかと思います。

また、行政とのかかわりを生活の中で体験したのは、実は恥ずかしい話、つい最近です。北海道放送、ＨＢＣという会社に６年勤めて退社し、フリーになって独立してから７年目になるのですが、今の家に引っ越したのが５年前で、初めて見たのが「広報さっぽろ」です。この広報さっぽろを見たときに、これをもっと早く、13年前にＨＢＣに入社し、１人で北海道で暮らしたときに見ていたら、あんなに寂しい思い、不安な思いをすることはなかったと思いました。というのも、ひとり暮らしを札幌で初めてしたときに、企業とのかかわりはあるのですが、どこの病院に行っていいかわからない。どういった公共的な施設、設備を使えるのかがわからないといった状況の中で、支えになるものが会社とのかかわりしかなかったのです。これがもっと早く身近にあれば、何かあったときにメンタルな部分、そして肉体的な部分で随分サポートしていただけたのではないかなと感じました。

そして、私個人のレベルで行政のありがたい部分を感じたのが、つい２カ月前です。西区の保健センターに初めて母子手帳をもらいに行きました。そうしましたら、保健婦さんから電話がかかってきました。そして、母親学級と父親学級のはがきをいただいたときに、たったそれだけのことと思わ

れるかもしれませんが、「ああ、こんなふうに市民なのだ。守ってもらえるのだ」という、自分から何もアクションを起こさなくて、待っているだけで受けた初めての感動でした。ああ、守られているのだなと、これは本当にありがたいと思いました。残念ながら勤務日と重なってまだ利用ができていないのですが、年齢的にも私の周りには働きながら子供を育てている人や、働きたくても育児のために働けないという同年代の人たちがたくさんいます。世界の労働人口のグラフってきれいな台形ですよね。10代後半から上がって、そして60近くまで平行で、そして緩やかに落ちていく。でも、日本の労働人口のグラフを見てみると女性だけがM型になっています。一度労働人口ががくっと下がるのです。それが今国の調査では30代、30歳から35歳までが一番多いのです。アンケートによると、理由は圧倒的に育児です。働きたくても今の育児制度ではどうしても、例えば金銭的な面で認可の保育所に入りたくても、順番待ちです。

会場にいらっしゃっていると思うのですが、市民活動でスリランカと札幌のかけ橋、留学生のコーディネートをされている方が、やっぱり留学生を受け入れたときに、子供を預かってもらうところを探すのが一番苦労するよ、とおっしゃっていましたが、そのとおりでした。実際探したけれども順番待ちで、とても入れるものではありません。私の友人も、金額の部分でやっぱり待たなければいけない。仮に預かってもらえたとしても、病気になったときに必ず引き取りに来てくださいと連絡がきます。今は三つほどの病院で受け入れはあったとしても、そこまでタクシーでしか行けない。逆にお金がかかってしまう。経済的な理由で子育てをしながらなかなか社会に復帰できないという制度があるというのは、本当に現実だなと思います。

また、環境としても先日の十勝沖地震で、公立の学校、小学校と中学校が臨時に休みになりました。ということは、休みだから学校で子供たちは見ませんということですね。でも実際共働きの家庭で、小学校１年生、２年生の子供をあれほどひどい余震の中で置いておけず、休みをとらなければ、結局子供をだれも見てもらえないという現実がありました。今、札幌で同じことが起こったときに、一番安全そうで頑丈そうでたくさん人がいてという学校で、希望者があればきちんと子供をケアしてくれるような、そんなサービス、サポートというのも挙げれば切りはないのですが、望まれることではないかと感じております。

以上です。

（「座談会は短くしてください。大事な話があるんです」と呼ぶ者あり）

○安　田：　ありがとうございました。

会場の皆さんとの意見交換は、後半の方にお時間を設けていますので、先に座談会の方を聞いていただきたいと思います。よろしくお願いします。

鶴羽さん、母子手帳をもらって守られているのだなと気づいたというか、実感なさったというのは。

○鶴　羽：　恥ずかしい話私は、それまで会社と個

鶴羽 佳子氏（フリーキャスター）

大分県佐伯市生まれ。1991年千葉大学教育学部卒業。北海道放送（株）入社後、アナウンサーとして勤務。97年同社退社後、フリーキャスターとして活動。99年に（有）オフィス鶴羽を設立。現在、NHK「おはよう北海道土曜版」にキャスターとして出演中。2000年度から北海道教育庁生涯学習講師バンクの登録講師として、道内各地で年20～30回ほどのペースで研修や講演を行う。2003年10月から北海道生涯学習審議会委員を務める。

人という立場の行き来で、余り市民生活ですとか行政の恩恵を受けるというような感覚を感じたことがなかったのです。

○安　田：　気づかないで暮らしていると。それでも暮らしていけるというところがあるのですよね。

○鶴　羽：　そうなんです。ちなみにここに立つに当たって、私の会社は21歳から37歳まで20人いるのですが、全員に聞いてみたところ、日常の仕事や生活に一生懸命で、余り関心はないというのが100％でした。恥ずかしい話ですが……。

○安　田：　私も全然気がつかないで、行政サービスはあって当たり前という形で暮らしていたのです。いつ気がついたかといいますと、もう20年ほど前です。娘をベビーカーに乗せて買い物に行かなければならない、病院に行かなければならないということがあります。家の周りはちょっと坂が多かったので、ベビーカーを押して歩道を歩いて初めて段差に気がつきました。それまで何年もそこを通って通勤していたのですが、全然気がつかない。歩けるから不便を感じないのです。今と違い、歩道のスロープというか、段差を切り落としたのもなかったので、ベビーカーをすごく重く感じたのを覚えています。そのとき初めて、この道路ってだれがつくっているのかな、どこが管理しているのかな、多分こういうのって役所がやっているんだろうなと思いました。

それから、娘が大きくなって学校に入ります。1年生ぐらいのときはそんなにあちこち遊びに行かないのですが、だんだん大きくなったら自転車であちこち行きたくなります。小学校3、4年生ぐらいのときに、坂ですので自転車もある程度乗れるようになった。1年生ぐらいのときは怖いから恐る恐る乗っているのですが、3、4年生ぐらいになるともうピューッと行くのです。信号が黄色になりかかっても行こうとする。本当に口酸っぱく言っていたのです、はねられたら大変だからと。そのときに娘と同じ学校で近所のマンションの子供さんが、そこではねられて2カ月ぐらい入院するような大けがをした。危ないなと思っていたスクールゾーンで、やっぱり事故が起きてしまった。冬は除雪のために、道路はきれいなのですが、物すごく雪が高くなるのです。子供の背なんか越すぐらいで、全然見えないのです。「何か起きたら大変ね」と話していたのだけれども、大変ねと言うだけで、それ以上のことはどうしていいかわからなかった。

そのときに、北区かどこかで、やはり冬のスクールゾーンで子供がぱっと出たところ、交通事故に遭って亡くなったということがあって、それからスクールゾーンの除雪がダーッと入るようになったのです。これはやっぱり子供をちゃんと安全に育てていくために行政サービスが必要であって、私たちは困ったね、どうしようか危ないね、と言っているだけだったけれども、本当はもうちょっと何かできたんじゃないだろうか。そのときは子供が小さかったので、安心して安全に子供を学校にやれるスクールゾーンなどの環境がとても気になりました。

それから10年たって、今私が行政の中でちょっと関心のあるテーマは、去年小さな事務所を始めたものですから、企業への支援とか、会社を立ち上げるときのいろいろな制度です。それからうちは女性のスタッフが多いのですが、人を雇うときには、子供さんがいる人たちが働きやすい環境をどうやってつくっていけばいいか。私だけではできないものがいっぱいあります。そういう企業支援というものが行政サービスの中では今気になるわけです。

ずっと札幌市民でいるのですが、年代によって私が気になる行政のサービスというのは変わってくるわけなのです。今日会場の中にいろんな年代、ご職業の方がいらっしゃると思いますが、それぞれ行政に対するニーズとか必要なサービス、このまちに住んでいていろいろなものがあると思います。そういう行政サービスを提供していく市役所の役目はどういうふうに変わってきているのでしょうね。

地域の計画、地域の役割分担

○宮　脇：　すごく難しい問題なのですが、まずそれを考えるに当たってはやはり、「公共サービス」と言われるものと「行政サービス」というものは違うということを、整理しておく必要性があると思います。といいますのは、「行政サービス」というのは、札幌市役所が提供している公共サービスのことです。ということは本来、公共サービスというのは市役所がすべてやるべきことではなくて、住民の皆さんや企業、地域全体で担っていくものであるということが基本なわけです。ところが、戦後60年近くの中で、公共サービスはすべて行政が提供すべきだという仕組みになってきてしまったということがあります。先ほど鶴羽さんが、家庭と企業の行き来でずっと生活をしてきたと言われて、そこの中では行政は余り意識しないで済みましたというお話があったと思うのですが、経済成長する中で、個人も企業もみんな忙しくて、非常に細分化されたというのでしょうか、専門的に分かれて活動するようになっていったわけです。その中で、地域全体のことなどは行政にお任せしましょうという風潮がどんどん深まっていった。それが今日、行政と住民との間の距離感を物すごく生む一つの原因になってきたと思うのです。

ここに来て、公共サービスというのは何も行政だけで提供するものではないという考え方をもう一度持っていくべきではないかということが言われ始めています。そのことは、先ほど市長も言われましたが、今まで公共サービスをすべて行政が提供できてきたという背景には、まず国がかなり札幌市に対しても財政支援、財政移転をしてきた。ところが、それがなかなか難しくなってきた。

それから、その一方で非常に画一的なサービスであったわけです。東京と札幌というのは当然生活環境が違うわけですが、そういう地域性をほとんど無視した形での政策がとられてきたことで、どんどん地域とそういうサービスが乖離していったというのが今までの状況だったと思います。しかし、国側が地方分権を進める、あるいは地域の皆さんも多様な生活、ライフスタイルというものが出てくると、今までのような画一的なやり方というのがなかなか通用しない、もっと変えていきましょうといったことが当然の話になってくるということだと思います。

宮脇　淳氏（北海道大学大学院法学研究科教授兼高等法政教育研究センター教授）

東京都千代田区生まれ。1979年日本大学法学部卒業。参議院事務局採用、83年経済企画庁、85年参議院予算委員会、90年（株）日本総合研究所に勤務。96年北海道大学法学部・大学院法学研究科教授、98年（株）日本総合研究所主席研究員などを経て、2000年から現職。行政学、財政学、政策論を専門とする。内閣特殊法人等行政改革推進会議参与、内閣府参与、北海道庁政策評価委員会会長などを務める。

難しい話になっているようにも思えるのですが、例えば皆さん、札幌市の計画あるいは札幌の目標と聞いたときに、その所有者はだれだとお考えになるでしょう。だれの計画であり、だれの目標なのだと思うかということなのです。大体それは札幌市役所の計画であり、札幌市役所の目標であって、それを達成するのは札幌市役所であるという、大体そうだろうと思うのです。それはやむを得ないことで、計画づくりにも目標づくりにも、今まで余り市民というのは本当の意味で参画をしてこなかった。したがって、達成するのも市役所、という

イメージだと思います。しかし本来は、札幌市の計画というのは地域の計画であり、行政と住民とそこで活動する企業との連携によって達成するべき計画、目標であると思います。そうすることによって、当然行政も役割を担いますが、住民の皆さんも役割を担っていく。そこに参加ということも出てくる。

ですから先ほど、世代ごとにライフスタイルが違いますね、とご指摘いただいたわけですが、そのとおりだと思います。その中で最近よく行われるアンケート調査で、市民満足度という言葉がよく使われるわけです。ところが、この言葉で注意しなければいけないのは、満足度というのはだれが提供するものなのかということだと思います。市民は満足を受ける人、行政は満足を提供する人と考えた瞬間に、今までと同じ形になってしまう。要するに、市民も含めて地域における満足度を高めていくのだという意味でとらえていかなければならないと思います。

ただ、そのことをしていくに当たっては、極めて今、制度というものが制約になっているわけです。ですから、これは地域に合った、あるいは世代に合ったサービスというものをきちんと住民が選択をして、そしてそれを提供していくためには、やはり制度そのものにいろんな制約があって札幌市役所も非常に苦悩されていると思います。住民の皆さんの声を聞いても、そういう制度があってなかなか自分たちの思うようには実現できないということがあるわけです。ただ、こういった問題も、行政だけで、市役所だけで取り組んでいたのでは限界があるわけで、これは地域全体で「もっとこうしてくれればいいじゃないか」ということを札幌市だけではなくて、国などにきちっとぶつけていくという議論が当然必要になってきて、それがやはり地域づくり、地域のブランドをつくるための一つの原動力になると思います。

最後に、今日の座談会の「あれもこれも」ではなくて、「あれかこれか」ということですが、これからは市民の皆さんも含めて、地域で選択をしていく時代なわけですけれども、選択してくださいというと、選択しなくなるということがあります。それは選択をすることには必ず責任、リスクが伴うわけです。そういった責任とかリスクも地域で受けとめていく。しかし、自分たちの地域やライフスタイルに合ったものを役割分担していくのだということをともに考え、ともに行動していくというのが、先ほどおっしゃられたような地域や世代に合ったサービスをつくり上げていくことではないかなと思っています。

○安　田：　難しいお話をいろいろやさしくお話ししてくださったのですが、市民満足度という言葉は本当に今新聞、テレビ等いろんなところでも聞かれます。顧客満足度という消費者理論から入ってきていますが、市民はサービスの提供を受けるだけ、受けて満足度をはかるということだけではなくて、市民も含めて満足度を高めていく。市民はサービスを提供する側にもなる、つくっていく側にもなるというお話です。

市長は、市民満足度をつくり、提供する側であり、難しいところですが、市民から市長になられて一番大きく見えてきたことというか、違いを感じられる部分はどのようなことですか。

イマジネーションを持って社会にかかわる

○上　田：　私は55歳ですが、25年間札幌市民として生活をしてまいりました。市長選に立候補して今は市長となっておりますが、やはり何も行政というものを感じずに生活ができたというのが、正直なところだと思います。ただ、よくよく考えてみると、先ほど安田さんも鶴羽さんもおっしゃっておりますように、それぞれの置かれた立場で目の前に問題が出たときには必ず人の助けが必要だということになると思うのです。その人の助けが必要なときに、社会の仕組みというのが大事なのだと私たちは気がつくのです。そのときどうやってイマジネーションを豊かにすることができるかということで、参加の意欲が違ってくるだろうと思います。

『世界がもし100人の村であったら』という本は、すごく名著だと思うのです。あれは世界のことを考えるときに、人口100人に縮めてみると、どのぐらいの人がお金を持って、どのぐらいの人が貧乏なのかとか、そんなことが目の当たりにイメージできるという、自分の尺度に合わせたときに、初めていろんなことがわかってくると思うのです。僕は地域の中で生活をするときに、何もしなくても僕は幸せだと思えるときもあるかもしれないけれども、よくよく考えてみたら、僕は今55歳で、とりあえず元気で階段を上がってここまで来るという力はありますが、あと15年、20年たったらどうなるだろうかということを考えますと、やはりだれかの助けが必要だろうと思います。家族が助けてくれるかというと、そのときまで家族とうまくいっているかどうか自信もないというときに、社会のシステムの中で気兼ねなくだれかに頼める、そんな温かい社会を、僕は今から自分のためにつくっておきたいと思うのです。それは立派な公共サービスです。ちょっとよたよた足元がおぼつかない方に手を差し伸べて、「さあ階段上がりましょうか」と言ってくれるのは、私のための仕事ではありません。人のために役に立つと。それがやはりシステムとして、そういう状況になったときちょっと困った顔したら、全然嫌みでなしに頼める、助けてもらえる。それが順繰り順繰り役割をみんなが担っていくというようなことをイメージしたときに、やっぱり社会の大事さということを僕は感じると思います。

ですから、それを感じづらくしているのは余りにも忙しいというか、日常生活の中でとても忙しいことに直面していると、なかなか感じないだろうと思うのです。でも自分の子供が、例えば先ほど交通事故の話もありましたが、だれかそのときに近くにいて、「危ない」と言ってくれた大人がいたり、ひょろひょろと出たときに「ばかもの、こんなところで渡っちゃいけない」としかってくれる大人がいたら、多分その子は交通事故に遭う前に、もっと自分で自分のことを訓練し、危険を回避する能力を身につけることができたであろうと思います。だから、自分を中心にもちろん考えます。そして、どれだけイマジネーションを持って社会とのかかわりの中で自分が豊かに生きていくのか、安全・安心に生きていくことができるかということを展望して、そのイメージに合った心地よい社会というものを、自分自身の参加によってつくっていかなければいけないのではないかなと思っております。

○安　田： 社会とのかかわりということで、本当にそう思います。

先ほど鶴羽さんが、若い人たちはほとんど意識しないで暮らしているとおっしゃいましたが、これは若い人たちだけではないかもしれません。仲間うちではかかわるのでしょうけれども、社会とのかかわりとなると、そこから一歩広がるというのはかなり大きな壁があるのでしょうかね。

上田 文雄 *（札幌市長）*

十勝管内幕別町生まれ。1972年中央大学法学部卒業。札幌で道央法律事務所に所属し、子どもの権利、公害対策、人権など広い分野で弁護士活動を展開。（97年札幌弁護士会子どもの権利委員会委員長、2001年日本弁護士連合会人権擁護委員会副委員長など）99年特定非営利活動法人北海道ＮＰＯサポートセンター理事長、2003年6月札幌市長再選挙で当選。

税金の使い道への関心

○鶴　羽：　そうですね。今は本当に自分の無知さを恥じています。ただ、自分と自分の周りの20代、そして同世代、やや上ぐらいの世代の人たちとコミュニケーションをしながらいろいろ聞いてみたのですが、まず高校卒業、専門学校卒業、大学を卒業して初めてお勤めをしたときに、社会の仕組み、例えば納める税金の使い道、あるいは年金の意味、そして社会人としての市民生活とは、という教育を受けたかということをできる限り聞いてみましたら、それを黙っていて教わった人はゼロでした。ですから、これが何に使われているのかがわからないので、普通、人間って払ったら払った分だけのものは要求したいと見返りを求めると思うのです。それが30年払ったのだったら当然そうだし、5年払ったら5年分見返りを求めるのではないかと思うのですが、自動的に引かれるものに関しては、正直言って余り関心がないというのが周りの反応です。

そして、周りには、社会人になって初めて札幌で暮らし始める方が多いのですが、まず隣の人の顔がわからない。地域の活動をしているかとかコミュニケーションがあるかと聞いたら、知らない人から話しかけられるのも、挨拶をするのも怖いというのです。そういう拒否反応というのも、悲しいかな、ありましたし、自分も10年前を考えたときに、確かにあったような気がします。知らないゆえに怖い。だから、知らないのだったら知り合えるような場や、自分を含めた暮らしの環境をどこまで入手できるかということがあったと思うのですが、では今はどうかと。今はどんなサービスがあるかをどうやって調べるかと聞いたら、7割以上がインターネットでした。あるいはお勤め、パート、仕事をしている人たちに聞くという、あくまでも知り合いの範囲で聞くというのが、そういう情報のとり方でしたね。

○安　田：　そうですね。こういう時代ですから、人とつながりを持つのが怖いとか危険と裏表というところもありますね。それと、私も事務所で若い人に給料払ってみても、みんな関心があるのはやっぱり幾らもらえるかという差引支給額だけなのです。あとは健康保険も厚生年金も雇用保険も所得税も引かれているのです。それで、今子育て世代の30代ぐらいですと、本当に引かれている額も大きいし、給料は上がるどころかボーナスカットとか、そういう状況なのです。そのほかに消費税でまた払っていますし、住民税だけではなくていろんな形で払っているのですが、払っているお金の使われ方に対しては、本当に関心が低いです。

○鶴　羽：　もっと早くからそういうのを学校なり何かの教育の中で積極的に取り入れなければ、関心は生まれづらいのではないかなと思います。

○安　田：　学校の中では習わないですし、多分どこでも習わないまま大人になってしまうというところがあると思います。先生、今の現役世代というか、子育て世代みたいなところの負担というのは結構大きいと思うのですけれども、行政だけがやるわけではない公共サービスという考え方でいきますと、いろんな人がサービスを提供する側にもなって、使う側、これから選択していかなければならないという場合に、責任とリスクというお話ありましたが、それと合わせて負担というのがありますね。そういう面でいきますと、今私たちが使っているいろんなサービスやインフラの負担を自分たちの子供が背負うという財政構造です。それでいきますと札幌なんかは、国もそうでしょうけれども、かなり大変なのでしょうか。

先のコストを見すえた投資

○宮　脇：　そうですね。今のお話を伺っていて、財政という言葉をお聞きになられると、恐らく札幌市役所のお金のやりくりの問題だよね、というイメージが強いと思うのですが、実は財政というのは、地域に住まれている住民の皆さんの将来の運命であるという定義づけが財政という言葉にはあります。

これまでは、いろいろな政策をやったり制度や施設をつくったりしてきまして、どんどん経済成長しましたから、何となくそれを支えてこれたわけなのですが、今ご指摘があったように、これから札幌市の場合には、今までの政策のツケが大量に回ってきます。具体的に言えば、一つはいろんな施設等のハードをたくさんつくってきたわけですが、老朽化が進んでくると、つくり変えたりしていかなければいけない時期になるわけです。それから、職員の方々の退職給与も支払わなければいけない。これは今起こっていることではなく、過去にいろんな施設をつくったり、職員の皆さんを採用した結果、これから起こるものであるわけです。ですから事前に十分わかっていた、わかるべき情報なのです。ところが、そういったものが十分市民の間の共有が図られていない。ですからどうしても、どんどんサービスは拡大させていけばいいんだというイメージが強くなってしまうわけです。

ですから簡単に言うと、施設をつくる際のコストは安くても、後の維持管理とかいろんなサービスを提供するコストというのは、物すごく高くなるわけです。それがどのくらいかかるかを、今まで把握をしてきちんと投資をしてきたかというと、していない。これは札幌市さんだけではなくて、今までの仕組みがそうであったわけです。だから、その辺はもうこれからはきちんと共有をして、選択をしていくことによってあれかこれかをきちんと見きわめていく、そういう情報も共有できていくのではないかと思います。

○安　田：　市長、今までいっぱいつくっていて、これからのというのは、何か家庭でいうと、ローンで住宅や車を買って払おうかなと思ったら、お父さんそろそろ退職だし、娘の仕送りも大きくなってというのに似ているなという感じがするのですけれども。

○上　田：　僕ら弁護士のときには多重債務といいまして、債務をちょっとずつ払えばいいなと思っていたら、それがたくさんあるのでこんなに膨らんでしまったということで、消費者金融で困っている方がたくさんおられました。札幌の場合はまた特殊な構造で、大都市に転換する政令指定都市になったのは1972年、今から31年前ということになります。すると区役所、区制を敷きます。当時は7区、この区役所をみんな建てなければならない。1件1件建てているのではなく一斉に区役所を建てますと、30年たつと30年たった建物が七つあるということになります。そうすると、耐用年数というのがあり、建てかえなければならないときも一緒になってしまうのです。これは本当に大変なのです。

それから、もう一つ、職員の数もそれだけふえるわけです。一気にどんと職員の数がふえ、その方が30年、40年たちますと退職されます。退職金もどんと一遍に出ていってしまうというようなことが重なるわけです。そういうことで、札幌の財政というのは、宮脇先生がおっしゃるように、予見できたはずのことなのですけれども、ある程度は経済も成長していくだろうと見込んでやっていたはずのものが、少し経済のかげりがあって、そうではなくなってしまったときにギャップが激しくなって、大変な目に遭う、今から本当に厳しい状況になるだろうと言われているのです。

自然と都市機能

○安　田：　それで、新しいまちづくりの計画をつくるために今いろんな意見を募集したりしていますね。アンケートも市民1万人を対象として、40％以上の回収率ということです。これは、最近の世論調査では20％台なのです。その中で40％を超えているというのは非常に関心が高いということなのですが、その中から、いろんな質問をしているうちの幾つかをご紹介したいと思います。

まず、望ましいまちの姿「どう思いますか」という自由記入がありましたので、ちょっとご紹介しますと、割と目についた意見が「自然と都市機能の調和のとれたまち」「高い文化と都市機能が充実し、自然を感じさせる人に優しいまち」とか、「若い人が自信を持って働けるまち」「所得が少なくて

も自然環境、住環境で子供をのびのびと育てられるまち」、こんな姿を描いている方が多かったようです。

鶴羽さん、これからお子さんを育てる立場として、どんなところで育てたいという希望がありますか。

○鶴　羽：　夏場はいいなと思います。緑はたくさんありますし、公園もたくさんありますが、問題は冬です。今まで行った中央区のタウントークで、市長と住民の皆さんとの話し合いの中に、冬に子供を遊ばせる場がないという意見が多かったと思うのですが、その前の段階で冬に道路を歩けないという、そういうのは感じます。豊かな自然というのはいいのですが、住宅街の中って除雪もなかなか入らないから本当に道路がつるつるです。きっと後から除雪の話は皆さんからもあると思うのですが、そこの部分は、どうして家の近くの大きな道路は除雪が入っているのにここは入らないの、と聞きましたら、「これは国道だから国の予算、こっちは道道だから土木現業所の予算、ここは市道だから市の予算と、道路によっても違うからなんだよ」と教えてもらったのです。そういった部分で制度の問題はきっとあるのですが、もし可能であれば、区で使う除雪費、地域で使う除雪費があるとしたら、もっと効率的に必要なところに行けるような設備はないのかと思います。

あと、私の働くすぐそばにすてきな公園、大通公園があるのです。この間初めて大通公園を自転車に乗って散歩をしてみたのですけれども、信号が赤になるごとに自転車もとまらなければいけないし、道路もかなり込み合っています。ああいった公園も北欧やヨーロッパのまちでは、それはきっと公共の地下鉄を使ってほしいという部分もあると思うのですが、わざと中心部を車で通りにくくしているのですよね、不便なように。東京からよくこちらに友人が出張等で来るのですが、聞いてみたら、「いや、札幌っていいね」といいます。どうしてかと聞くと「車で来れるから」と。東京はそう言えば車は使わない。どうして。不便だから、込むから、時間が読めないから車では行かないと。そのかわりほとんど公共交通機関を使うということです。市長のタウントークの中で本当に印象に残っていたのが、地下鉄の赤字がペイできる範囲が80億ぐらいで、今実際五十数億、それを考えると夜も眠れないというコメントがとても印象的だったのですが、その解消にもつながる部分ってたくさんあると思うのです。そのためには、車で行かないのだったら地下鉄の近くに広い駐車場があって、きっと地下鉄が終わる時間には絶対車は撤去しないといけないという決まりもあると思うのですが、そういったもっと細かいところのケアがあれば、自然という部分と便利な都市機能というところを、もうちょっと分けて考えられるのではないかなと、これからのまちづくりの部分で感じます。

○安　田：　市長、いかがですか。難しいですよね、自然と都市機能というのは。

○上　田：　札幌のどこを売り込むかという、この間、今日本で一番話題になっている六本木ヒルズという大きなビルが東京にあります。そこで企業の誘致をするためのプレゼンテーションを私が前座でやったのですけれども、札幌の売り込みのキーワードは何かと工夫して考えたのですが、それはやっぱり企業というのは人でしょう。優秀な人がたくさん集められると、いい労働力を確保できる。そのいい労働力はどういうところにできるのかというと、やっぱり住環境。人間ですから一生の中で子供を育てたい場所というのがありますでしょう。豊かな自然の中で、窮屈な思いをしないで育てることができたらいいだろうなと。育てる大人の側にとってもいいまちだなと思える、そんなまちとして札幌はとてもいいと思ってくださいと。ただ、冬、雪が降ります。除雪があります。毎朝、ひと汗かいて除雪をして、そして仕事に行くというのもさわやかでしょう、と悔しまぎれに言ってきたのですが、やっぱり自分のまちもいいことばかりではないわけで、それを丸ごと引き受けてこそ、やっぱり札幌人としていくのだというふうな気概というか、そんなものを持ちたいなと思います。

そして、地下鉄も、使う人が少ないというところ

がやっぱり大きな問題ですが、僕はすごくいい財産だと思うのです。北海道は570万人いて、その中で札幌を含めて約200万人ぐらいの方が地下鉄を利用可能なのであって、ほかの人はどんな頑張っても自分のまちに地下鉄はないわけですから、こんな定時制のあるといいますか、時間をはかることができる、そして冬の足として強い交通機関はないわけであります。これを使うことは都会人としてのおしゃれだとみんなで思ったらどうですか、ということを今言っているのです。そんないろんな要素がこのまちにはあるわけで、それを生かすも殺すも物の考え方だと思います。

今、地下鉄まで車で来てというのは、パークアンドライドというシステムです。札幌でも何カ所か郊外の駅に大きな駐車場をつくって、そこまでは車で来てください、都心部は地下鉄で、公共交通機関で生活しましょうというような構想でところどころやっております。そういう文化がしっかり根づけば、このまちはもっともっと便利に、そして快適な生活空間を獲得することができると思っております。

○安　田：　あと人口の動きを見ていますと、中央部の土地の値段が少し下がってきているせいか、中央区に戻ってきています。中央区がふえているわけではないのですが、減り方が鈍くなっている。これは東京でも職住接近ということで都心回帰が起きているのですけれども、そういうのも合わせると都市機能も使えて、まちなかに緑もつくっていくとそれも味わえて、通勤時間が短くて、そういう暮らしが可能になるまちという感じですよね。

○上　田：　とても快適に過ごすことができる可能性を十分に持っている、都市機能を備えたまちであると思います。あとはそれをどうやって自分と関係づけて、自分の生活を精神的に豊かに、それから時間をたっぷり使えるようにコーディネートするかがやっぱり課題かなと思います。

○安　田：　私は北口の方に事務所があるのですが、お昼休みを１時間ぐらいとるときに北大の構内に行けます。郊外に事務所のある会社の方もそうでしょうし、中心部にあっても、お昼休みに公園に行ける、大通公園に行けるとか円山に近いとか中島公園に近いとか、そういうところというのは結構あると思うのです。ニューヨークのセントラルパークではないですが、それはとってもぜいたくなことです。これからは大きな会社とか、大きな工場を持つ時代ではないので、それも結構売りになるいい部分ではないかなという気がするのです。そうは言っても、いろんなことを全部負担しながらではこの限られた中で何を優先的にやっていくのか。

お金の使い道は自分たちで決めていく

○上　田：　そうですね。何を大事に思うかです。今までまちをつくっていくときにはハードのまちづくりをしていく。都市機能を備えていくには、中央からお金をもらいながら補助金でやってまいりましたでしょう。ですから、まず中央官庁からお金が出やすいように作文をしていく作業をしなければならないわけです。それは、市民がこんなのがあったらいいな、こうしたらいいなと思って、それをまとめて持っていくというのではなくて、中央のサイズに合って納得ができるようなプランというのはそれは大体決まっていますでしょう。「札幌ならでは」ではなくて、どこのまちでも都市として備えている機能というものは中央官庁を納得させやすい、説得しやすいのです。それを札幌に持ってくると、本当に札幌に必要かどうかというのはまた別の問題だし、あるいは札幌人の生活文化に合ったものかどうかということになると、そこにずれが出てくる可能性が十分あるわけです。そういうものではなくて、これからは、金は向こうから来ないわけですから、こちらで自前で本当に自分たちで自由に使えるものを、自分がしっかりと自分たちの地域のこと、自分自身のライフスタイルというものを定めて、このまちに必要なのはこういうことだ、こういうことにお金を使おうと市民が選択をしなければならない、そういう時代になってくるのだということを申し上げているわけ

です。

○安　田：　宮脇先生、今までは国の基準に合わせた方がお金もらいやすかった。これからはそうではなくなるというのは、今三位一体改革とかいろいろ変わりつつありそうな議論が盛んになって、余り変わるのかどうかもよくわからないのですが、こちらで決めた計画に向こうが合わせて国を動かすのか、それとも最初からこっちで使うお金をもらって、ここで全部決めてやっていくのか、どうこれから動くのでしょうね。

○宮　脇：　非常に難しい問題ですが、市長が言われたように、今まで国の考え方に合わせていろいろやってきたわけです。ですから、正直言って、何でこんな考え方を持たなきゃいけないのでしょうといったものもたくさんあるのです。

例えば保育所の場合でも、公設の場合には補助金をもらおうとすると定員が60人以上とか、待機児童が20人以上とか、一定の調理施設がなければいけないとか。それから、福祉施設でも、建てかえるとき以外は個室にしてはいけないとか。身近な例では、パソコンを購入するとき補助金もらったら、そのパソコンは10年間使わなければいけないとか、そういうものがたくさんあるわけです。今のはわかりやすい例なのですが、そういったものがありとあらゆるところであって、それがさっき市長が言われたように、東京の視点で画一的に決められてきたということで、今回補助金改革というのが言われているのですけれども、そういう議論が内閣でどれだけ進んでいるかというと、結論からいうとほとんど進んでいないというのが現実なのです。

ただ、進んではいないのですが、やはり税源というのは国が税金をとっていた分を地方に渡しましょうとか、そういうことが少しずつ進んでいくことは確かだと思います。今議論しているのはたばこ税です。たばこ税を地方に少し渡しましょうかといったレベルですが、そういったものであったとしても、その財源がみずからのところに来た

ときに、自分たちできちんとやるべきものを選択して、それを実行していく体力を持っておくことが必要です。ですから、その財源の規模とかそういうことは、すぐには進んでいかないと思います。ただ、少しずつでもいいから政令指定都市の中でもやっぱり札幌は体力ありますねというところをどんどん見せていくことが必要で、恐らく大きな地方分権という流れはもう変わらないですから、若干時間がかかったとしても、そういう中での存在感をあらわしていくべきだと思っています。

○安　田：　お金が来てから、どう使おうかと考えるのではなくて、来たらすぐ実行に移せるぐらいに、今からちゃんとウォーミングアップしていくということですね。

○宮　脇：　そうですね。

○安　田：　家庭の主婦のお金の管理に似ていますよね。ボーナスが入る前からちゃんと分けることを考えるとか、そういうのにとても似ていると思いませんか、鶴羽さん。

○鶴　羽：　単位は全く違いますが、でも考え方としては、ただあきらめるとか待つだけの姿勢ではなく、考えるところに参加できるのかなという期待感は、今のお話で持てました。今までは雲の上の自分の関係ないところで決まるだろうとか、住民の要求があったとしても制度が邪魔をして、国までのところで決めるのであれば動かないであろうと思ったことが、市のレベルで、お金はこちらで管理するということは、市の行政にかなり決定権や発言力が出るということですよね。その時代は、もうそこまで来ていると考えてよろしいのでしょうか。

○宮　脇：　そういう流れが始まったというところですね。まだちょっと、来年からというわけにはいかないのですが。

○鶴　羽：　流れが始まったと。始まらないよりはいいと思います。

世代によって異なるニーズ

○安　田：　始まって、どこが最近に手を挙げてキャッチして動き出すかというところなのかなという感じがするのですが。市民アンケートの中で、「元気な経済が生まれ、安心して働ける街さっぽろ」とか五つの分野の目標を上げていますが、それに対する市民の4,000ちょっとの方の回答が、世代によってかなり違います。ちょっとご紹介したいと思います。

まず、経済の部分ですが、現役世代は「就労支援や雇用機会の創出」というのが一番で、どの年代でも過半数が上げています。ちょっとリタイヤしている人たちにとっては、30％台の支持です。これを上げているのは女性の方が高いのです。ということは家計を預かっている、または独身の女性もいっぱいいますが、ヒシヒシと感じている。なぜかというと、消費者の意識は女性の方がすごく高いので、多分使えるお金が少ない、可処分所得が低いという実感がかなり大きいと思います。

それから二つ目として、「健やかに暮らせる共生の街さっぽろ」。これに対しては、「子育て仕事の両立支援」を上げている方が20代、30代、若い方が60％。一方、ある程度子育てが終わった50歳代以上の方は「高齢者や障害者の生活支援」を上げています。世代によってやはり大きく求めているものが違うところがあります。ただし、札幌は「芸術・文化・スポーツを楽しむ環境づくり」というのは、各年代40％台を上げています。この分野については、皆さん共通の認識、共通の目標があるのかなと思います。

それから「豊かな心と創造性あふれる人を育む街さっぽろ」。これに関しては、「思いやりと豊かな心を育む教育」というのは、各年代50％以上の方が支持していまして、年齢が上がるにつれてそれは高くなっております。

それで、「社会体験や自然体験機会の充実」というのは、子育て世代が40から50％を上げているのに比べて、「家庭の教育力が落ちてきているから

それを向上してほしい」と上げているのが、60歳代、70歳代です。

そして、「不登校に対して何とかした方がいい」というのが、20代から70代まで、30％の方が上げています。ちょっとこれが気になったのですけれども、札幌のまちは安全だと思っていたのですが、その度合いが悪くなって「治安が悪くなってきた」と感じている方がふえているのです。そう感じている方がふえているというところが、本当に都市のいい面と悪い面、いろんな都市の問題というのがありますけれども、犯罪件数は多いですね。それが出てきているというのが見えました。このような形で、世代によって今すぐ欲しい姿、ニーズというのが違うのです。これをどう譲り合ってというか、折り合いをつけてまちの中で暮らしていこうかというのは、とても大きな問題かなと思うのですが、市長いかがですか。

○上　田：　それはやっぱりイマジネーションの問題だと思うし、どれだけ人が優しくいられるかという、他者に対する配慮といったものを持つことができるかというところがポイントかと思います。ですから、ユニバーサルデザインという言葉がありますでしょう。今だれにとっても快適なといいますか、ハンディーを持っている方に優しいということは、ハンディー持っていない人にとっても優しいのだという意味合いになるかもわかりません。それはやっぱり、僕は大丈夫だからとりあえず要らないよということではなくて、社会のシステムの中でこれは必要なものなのだと、私たちだっていつハンディーを持つようになるかもわかりません。事故に遭うことだってあるだろうし、不摂生がたたってひっくり返ってしまうことだってあるだろうし、明日のことはだれにもわからないわけです。だから、ハンディー持っている方を見て、それは人ごとだと思うのではなく、やっぱりイマジネーションです。そしてそのイマジネーションを持つと、他者に対する配慮の心が生まれてくる。豊かな心、優しい心がそこに出てくると思いますので、そういう心なしにいろんなことをやっても、多少目先の便利さはあるかもしれない、満足できるかもしれないけれども、社会全体の中で、自分が本当に豊かな社会に住んでいるという実感を余り味わえないで生きることになるのかなといつも思うのです。

市民、行政に期待される役割

○安　田：　先ほど市長が、参加と合わせてつながりとか連携とかという言葉をお使いなっていましたけれども、この同じアンケートの中で、市民に期待される役割というのも市民に聞いているのです。それちょっとご紹介したいと思います。

非常に多いのが、自分たちのできることは自分でという意識を持つ。それから、市民としての責任を果たすとか、公共性についての意識づくりとか、札幌市民としての自覚とプライドという言葉が結構見受けられました。やはり自覚とプライドというのは責任も感じているということですよね。

それと同時に、行政に期待される役割というのも聞いているのです。それは、縦割り行政をなるべくやめてほしいということと、市の枠にとらわれないで国、道、市町村の連携の中で行動してほしい。それから企業感覚を持って働くとか、従来の形にこだわらず、新しい発想をどんどん取り入れる。それから、市民との壁をなくす行政機構の改革とか、このような意見が出ていました。

後半は皆さんとの意見交換にしていきたいと思いますが、やはり先ほど宮脇先生が公共サービスは行政だけがやっている時代ではなくて、市民だったり企業だったり、それから市役所が役割分担しながらやっていくとおっしゃっていましたが、それぞれの役割は、責任を持ってある程度やっていかなければならないということですよね。このつながりをつくっていくというのは、実際は本当に難しいと思うのですが、やっぱり今日のような機会からですか。

○宮　脇：　先ほど市長が基調講演で言われましたが、本当の協働というのは、ともに考え、ともに行動するということだと思います。当たり前じゃ

ないかという感じなのですが、今までの協働というのは、行政は指示する人、市民はやる人・行動する人というイメージが非常に強いわけです。ですから、一緒につくっていくというものではなかった。その本質のところはやはり行政と市民との間が、普通の共通の言葉で話していなかったし、同じような情報をきちんと共有もしてこなかった。ですから、市民の皆さんとのネットワークをつくっていくということは、ごく普通の言葉で話していただいて、情報を共有するということから始まると思うのです。

ところが、行政は普通の言葉で話すのは難しいのです。いろいろな制度上それが許されない場合があるのです。でも単にそれを業界用語で話しているから、けしからんではなくて、市役所の皆さんにとっても話せるようないろんな取り組みなり、あるいは市民や地域もどんどん市役所の方から壁が乗り越えられるような環境づくりが必要だと思うのです。ですから、お互いにそういうところは支え合って前に進めていくということではないかと思うのです。

○安　田：　業界用語って、行政の言葉も業界用語と、一つの業界ですよね。今、出前講座というのを市で始めたそうです。それは、20人ぐらいの市民が集まって、リストがあるようですが、こういう話をしてほしいと市に頼むと講師を派遣してくれるそうです。講師は市の職員なのですが、そこは市に苦情を言ったり要望を言うものではないらしいです。

道内幾つかのまちで出前講座をもう何年も前から始めているところがあります。私も調べたことがあるのですが、それのアンケートを住民ではなくて職員に対してとったところがあります。職員の方のアンケートを見ると、最初は物すごく緊張しているのです。何を聞かれるかわからない。行きたくないと。一般職の人はそうでもないのですが、管理職の人が一番行きたくない。それで一般職からどんどん行っているのですが、１年たってアンケートをとったのを見せていただいたら、やってよかったというのがほとんどだったのです。それは市民に話すために、今の自分の仕事をどうやって説明したらいいかというのを一生懸命勉強しなければならない。どうやって伝えたらいいだろうか。それと、本当に真剣に話したらわかってもらえて、頑張ってくださいとか、頑張っているのですねと言われたのがすごくうれしくて、仕事の励みになったという回答が物すごく多かったのです。それでびっくりして聞いたところ、いや本当にそうなのですと、研修よりいいかもしれないと、その担当の方がおっしゃっていました。それで、出前講座の数をどんどんふやしているまちもあります。

来場の方々との意見交換

来場の方々との意見交換

○安　田：　そんなことが少しずつ始まって、ちょっとまちが大きくなったせいでしょうか、市役所と市民との間の距離があり過ぎてという声がいろんな意見の中から出てきますので、これからはここだけの座談会ではなくて、ちょっと高いところに私たち座っていますが、フロアと意見交換という形で進めさせていただきたいと思います。

今の私たちのお話をお聞きになって、こんなことを聞きたいとか、これはどうなんだというのはありますでしょうか。

○男性Ａ（厚別区）：　いろんなことをやっているのですが、新渡戸稲造・メアリー夫妻メモリアルデイと市民運動をやっております。一昨年40名の実行委員会を立ち上げ、昨年の５月に創設の集い、今年の５月に第２回目の集いをやっています。なぜならば、1894年（明治27年）１月に新渡戸稲造さん、メアリーさんがフィラデルフィアから送られてきたプライベートなお金を投じて遠友夜学校をつくられた。それは50年間続いて1,000人以上もの経済的な事情で学校へ行けない生徒、あるいは晩学者、こういう人たちが遠友夜学校で学びました。後に国際連盟の事務次長になられたことは皆さんご承知のとおりであります。

こういうすばらしい先人に対して感謝の気持ちをあらわしたい、あらわさなければ申しわけない。そしてかつまた、若い人たちと一緒に、こういうすばらしい先人が札幌の地で15歳から18歳か19歳まで勉強し、そして農学校の教授となって帰ってきて、やがて『武士道』を著し、国際連盟事務次長になった、こういう大きな人物が札幌の地にいて札幌に対する深い思いを持っていたのだよということを若い人と一緒に知って、そして私としては30年、50年先には札幌から北海道から、各分野で世界を動かすようなリーダーを輩出したいという思いで、市民運動の実行委員長をやっている者であります。

さて、山ほど申し上げたいことがあるのですが、時間の関係がありますから、二つだけ申し上げましょう。

上田市長さんの冒頭のプレゼンテーションの中に、キーワードとして市民の力みなぎる文化と誇りあふれる街をつくりたいという話がありました。その線に沿った夢ある意見を二つ申し上げたい。一つ目は、公平に４人の方にという意味で安田さんと鶴羽さんのご意見をお伺いしたいと思います。土地感がなければお答えいただかなくてもいいのですが、北３条の西４丁目から西５丁目通りの間をイメージできますか。これはかつて北海道庁が札幌本府にできたときに、西５丁目までが、そして北は北５条通り、南は大通まで北海道庁の敷地だったのです。今はああいう状態になっていますが、実は今から10年ぐらい前に、札幌市がある事業を起こして、あそこにすばらしい空間をつくったのです。西４丁目、５丁目の間の通り、イチョウが樹齢100年です。そしてそこには札幌市、北海道の歴史を紹介するボードが幾つも陳列されています。そしてそこには北原白秋の「この道」の詩を書いたボードもありました。私はあるとき１時間

ぐらいあそこに立って見ていたのですが、現実は車が通り、そして歩道を歩く人もほとんどそのボードを見る人はいませんでした。そういうゆとりがないのです。

そこで、意見なのですが、あそこの交通を遮断するというのはどうでしょうか。西５丁目通り側に簡単なものでいいので何か交通遮断の施設を。お金は余りかからないのですよ。そして、あそこには日本生命ビルの裏に駐車場があります。それから、ＪＲが入っているビルにバスが来るぐらいで、交通量も非常に少ないのです。あそこの空間を道庁の赤レンガと一体化させながら、例えばこれからの将来のある若者の美術作品を展示する、あるいはフリーマーケットを奥さん方がやる、そういう工夫があってもいいのではないかと思います。

もう一つは、世界に誇れるといつもうたうのです。国際都市と市民憲章にもあります。しかし、札幌市は世界でどれだけ知られていましょうか。私も多少国内、海外回っていますが、札幌市といってもなかなか分からない。そこで申し上げたいのは、民主主義の進化、改良進化の実験都市に挑戦してみませんか。上田市長に申し上げたい。そして宮脇さんのご意見を聞きたい。民主主義はご存じのように、古代ギリシアの都市国家までさかのぼる歴史を持ち、市民革命の中で今日のデモクラシーがあるわけですが、たくさんの矛盾を抱えております。そういう矛盾を世界史的に見ていつかは是正しなければいけないことははっきりしているのです。したがって、そういう民主主義の改良、インプルーブメント、実はこれはアメリカでもイギリスでもいろんな動きあるのです。だから、そういう中で一つの民主主義を改良する、そういう実験都市にチャレンジしてはいかがでしょう。

○安　田：　二つですね。一つ目、北３条西３、西５というのは道庁の赤レンガの正面に向かっている東西の道路ですね。それをこんなふうに使ったらいいのではないかというご意見で、これは私と鶴羽さんに対してのご質問ですね。

それからもう一つは、札幌が国際都市を目指すのであったら、民主主義の実験都市ぐらい考えたらいいのではないかというのは、市長と宮脇先生ということですね。

難しい方から先に答えましょうか。市長、実験都市というのをお答えください。

○上　田：　私のテーマ「市民の力みなぎる」というこのフレーズは、まさにそういう思いを込めております。

それはやはりデモクラシーの実験といいますか、大都市における民主主義というのはどういうものなのかということを札幌というまちが、例えば連絡所という役所の出先機関が、２万人から２万5,000人ぐらい単位に１カ所ずつ、計87ヵ所あるというまちも珍しいわけであります。これをコミュニティーづくりの核にして民主主義を進化させるということを私は考えているということで、これは世界に誇れる本当に民主主義を徹底させるものになれればと思っております。

それから、札幌の知名度はそんなに低くないと思います。この間中国に行ってきたのですが、札幌はやっぱりすごいですよ。「日本に行きたい。日本に行くなら札幌だ」と大方の方が言っておられる。リップサービスではなくて、やっぱり札幌というのはそれだけ中国の人にとってみても、すてきなまちという印象を持っておられることを私は感じてまいりましたし、自信を持っているところであります。

○安　田：　宮脇先生、いかがですか。民主主義の実験都市。

○宮　脇：　今、市長が言われた点と若干ダブりますが、やはり区ですとか、あるいは区の中の一定の単位というところで市民全体で議論をしていくということが必要だと思います。特に、最近ではいろいろと市場の影響を受けたり、あるいは行政の効率化が叫ばれるわけですが、行政の効率化を進めていくためには、一方で強い民主主義はどうしても必要なのです。つまり、札幌市にとってみると地域についてはそれは重要なことなので、非効率だけれども選ぶのだ、ということがあってもいいはずなのです。全国的に見ると効率性が悪いと言われるけれども、それは地域の価値観からいって必

要なものなのだということをきちっと選ぶ。選ぶということはこれは民主主義、市場は選ばなかったけれども、民主主義は選ぶというものが当然あり得るわけです。ですから、そういう体力の強さというのは当然必要なことで、恐らく日本の中では民主主義も、市場に対する対応力も両方ともでき上がっていないのです。ですから、おっしゃられることは基本的な課題だと思います。

○安　田：　ではもう一つの方の、少し私と鶴羽さんがお話しできる点はどうですか。

○鶴　羽：　私、結論から言って大賛成です。道庁近辺だけではなくて、大通の片側も含めて開放して、子供たちが走り回ったり、自転車で動いたり、またマーケットでいつもにぎやかな笑顔があってと、ちょっと疲れたら歩いて散策したくなるような、そんな都市部の豊かな環境というのは、車の通りを遮断しなければ無理ではないかと思います。ただそれは、道路というのはやっぱり警察の権限ですよね。そこを規制が……

○上　田：　はい。規制をしています。

○鶴　羽：　そこの部分が市の権限に移らなければ不可能なことだと思いますので、そのあたりの規制をこれから変えることができれば、実現は早いのではないかと思います。

○安　田：　道庁の前のところは、私も前にボランティア活動をしていたとき、仲間と話していたことがあります。イチョウ並木があれだけすばらしい。夏でもいいです、一応木陰で。何であそこでカフェテラスとかできないのだろうか。大通の南側、北側もそういう話がよく出ています。せめて期間限定でもいいですから、ちょっとの間でもすれば全然違うだろうな。道庁の赤レンガ前で写真を撮っている観光客がすごい多いのです。あそこに車が入らなくても、逆にカフェテラスとか、ちょっとしたイベントがある場所になった方が人の流れが変わっていいかなと以前話していたことがあります。こんなので、お答えになるかどうかわからないのですが、でもこういうのもやっぱり市民の中から声として出てこないと、計画にはならないわけですね。

時間が余りないのですが、ほかにご意見お願いいたします。

今最初に目についたこちら側の男性の方、お願いします。

○男性Ｂ（中央区）：　ちょっと質問したいのですが、その前に感想を申し上げたいことがあるのです。私は上田市長の話を聞きまして、終戦直後の札幌と現代とが、非常に似ていることがあるなという感じがしたのです。どういうことかといいますと、戦後ちょうど札幌の人口は20万でしたけれども、戦争が終わって引揚者や復員者がどんどん集まってきました。そのときの状態と今と重ね合わせられたのです。最初の市長が高田富與さんでした。各地区を回り懇談会をしました。若かった私も意見を言いました。それがきっかけで市長室を訪問したり、地域の活動に市長も出るようになりました。そんなことから、札幌市の教育委員会が市民会館でまとまって成人式をやるまで、地区の青年たちが成人式をやりました。頓宮神社とか北海寺を借りて講師を自分たちで選んで、住所は今の連絡所、昔の出張所へ行って調べて、もう体が悪くて胆石という青年がいて、住所を調べてご案内をしたことがあります。もちろんそのときはどんどんどんどん子供がふえたのですが、今の中央区の東地区は非常に大きなマンションが建っています。バブルでもって非常に古かった家が売り払われて、逆にマンションが建っています。

それから、どうも上田市長のお話を先取りしているのかなと思うような気配もあります。お寺で７時にお経が終わるから、市民の方集まってくれとか、神社でもって行事があります。つい何日か前も、私の町内１ヘクタールか２ヘクタールもないところですけれども、消防署から来てもらって、自衛とか防災の懇談会を行い、20名ぐらい集まったのです。出前講座だかどうかわかりませんけれども、そういう自発的な動きがあるのです。

ただ、私が、ちょっとお願いをしたいことは、町内会と違った地域社会活動を振興できるような環境はできないか。何十年か前ですが、婦人少年室の婦人会議がありました。そこへ行って、これからの

地域における婦人活動はというテーマのときに、「町内会婦人部は、町内会婦人部は、」となるのです。私は男性でしたが発言させてもらいました。町内会ばかりが地域じゃないと思うと。もっと広い立場で発言できませんかと言いましたが、最後まで町内会から選ばれた方だったのでしょう。市の連絡所へ行って、人にもよるのですが、町内の役員であればパッと対応してくれても、余り物も言えなくてうろうろしている。何となくがっかりして帰ってくる人もいるのです。昔は、若い人は自由闊達に動いたのですよ。大人が自信がなかったものだから、中学生、高校生が非常な活動をしました。それが世の中が安定してきますと、何だおまえたち世間と違うことやっているんじゃないか、というような時代になったのです。今、非常に混乱期であります。若い人が力を持って、勇気を持って動ける状況が来たなと思うのです。町内会も大事です。非常に大事だけれども、町内会とともに地域社会で自由な活動が起きるような環境をひとつつくっていただきたいと思います。長くなりましたが以上です。

○安　田：　市長にちょっとご質問という形でよろしいですか。

○男性Ｂ（中央区）：　そういうことであります。

○男性Ｃ（北区）：　今の方からちょっと町内会の問題が出たものですから、それに関連して簡単に述べます。

北区新琴似に「まちの文化遺産」という防風林が残っているのです。私は、この防風林の景観を生かしたまちづくりを10年前からやっておりまして、そのいい風景のあるまちをどうつくっていくかということで活動してまいりました。

その結果として10年後に、6番通りは今拡幅整備されるものですから、そのときにせっかく拡幅されるのであれば、これは住民がつくるべきだと思いまして、住民の活動の中でどういう道路になったらいいのか、それから道路が含む景観はどうなったらいいかという活動を10年間やってきて、その結果やっとまとまりました。その間にも、シンポジウムから始まってワークショップ等、いろいろなことを全部住民自身がやってきました。ところが、今度まとまって札幌市に話に行こうという段階で、ある部署が、「住民がここまでやったのはすばらしい」と言ってくれました。ところが、ある部署は「あなた方個人がやったのでしょう。それは広がりがないですよ」と、そういう言い方をされるのです。ですが、それでは帰っていくところは何かということを今申し上げたいのですけれども、まちづくりの活動にはいろいろな形が考えられると思うのです。そこには多種多様なことが生まれてくると思います。それに対して札幌市はどのようにかかわっていくのか。今まではまちづくりといったら非常に簡単な1本の道がありました。行政が提案したことを連町が受けて、それが町内会におりてくる。そして、町内会の代表がいろいろ話をしてという形がとられてきました。それはそれでまちの骨格をつくっていると思います。

ただ、そのほかに、それに入らないような、もっと違う発想を持った違うグループ、それも小さなグループかもしれない。私どもも3人から始まりました。でも、多いときは170人の方に集まっていただきました。そういう活動をやっていながら、町内会とかかわらなければ、これは何か個人がやっているのではないかという話になる。そういうことを今の話から感じました。

○安　田：　ちょっと先ほどの方とお二方で、町内会の活動、それから今新しいのが出ていましたね。

○男性Ｄ：　今2人の意見なので、この際町内会をなくしてください。

○上　田：　町内会だけが地域社会を形成するものではないということは、これは比較的皆さんのご理解いただけると思います。世の中は単一社会ではないわけですから、問題別にさまざまな立場の方がおられて、世代もあれば職業もあり、いろんな趣味、関心も違う方がたくさん集まっておられるのが地域社会ですから、一つの地縁ということで集まる町内会組織ですべてが代表されるわけではない、統合されるわけではないと思います。問題意識といいますか、木を大事にしよう、あるいはこの景観を大事にしようと思われる、そういう問題

に関心を持った人が集まることもあるだろうし、うちの地域の子供たち、このごろちょっと荒れているなと。大人たちみんなで教育してやろうか、手伝ってやろうか、一緒に遊んでやろうか、こういうことで集まる人たちだっているわけです。そういう意味で問題関心別にいろんな人の固まりというのが出てくるわけですから、町内会もその一つというとらえ方で、なくしてしまえというご意見もありますが、そこまで過激にならなくても、私はいろんな役割をいろんな団体、いろんなグループが担い合って、それが地域をつくっていくというところで連絡所などが機能できればいいなと思っております。

○安　田：　先ほどからお手を挙げていらっしゃる方、お願いします。

○女性Ａ（南区）：　簡単に言いますけれども、市長さんが五つの目標を掲げられた中に「元気な経済が生まれ、安心して働ける街さっぽろ」と書いてあります。これは一番重要なことなのですが、皆さんもご存じのように、北海道は医療費が一番高い、一番使っているのです。日本一です。それと、就職が一番ないのです。そのために格好よく新しいまちづくりとか、楽しいことばかりお話ししていますが、大学卒業生の就職率は５分の１なのです。だから、私たちが幾ら頑張ろうと思っても、働く人がいないわけですから、それを一番先にやっていただきたい。いい格好なんかしなくていいです。市長さんは革新市長で私は期待をしております。ですから、今までの悪いところはもう遠慮なく、長野県の田中知事のように、本当に古いことを投げてもいいから、いいことをするのですから市民はみんな賛成いたしますから、そんなその他の人たちのことを気にしないで。私この間要望書を書きました。読んでくださいましたか。

○上　田：　読みましたよ。

○女性Ａ（南区）：　だけどこれはひいてるような答えですね。私はそれを見てがっかりいたしました。これじゃだめですよ。私、本当に期待していたのです。

先ほど町内会のことを廃止すればと言った人もいますが、私も今回はそう思いました。だから、私は手をたたいたのです。というのは、12月11日に南区でタウントークがありますが、町内会の人たちが話し合うのであって、私たちは入れないのですよ。ですが、私は強引に参加してお話をすることになりました。私の顔を忘れないでください。一番先にしゃべりますから。子供たちの就職を考えてください。それには要らないものは切り捨てて、そういうことに力を入れてください。それでないとまちづくりなんて考えられませんから。きれいごとばかり言わないでください。

○上　田：　ありがとうございました。

○安　田：　町内会のお話がちょっと長いのですが、医療費とか就職、若い人の雇用の問題ですね。

○上　田：　高校生が卒業して30％ぐらいしか内定していないとか、大学生だって言われるように２割とか、格好いいこと言うなと言われて、本当にそのとおりだと思います。一番基礎になる働く場所を確保できないという状況をどう考えるのかと言われたときに、これは行政でできる範囲というのはまず会社をつぶさないことだと思います。新しい産業を生むのも大事ですが、今、倒産しなくてもいい中小零細の企業の方々が、倒産するという状況を何とか回避していくことで、就業する場所を確保するということは本当に大事なことです。今、来年度予算でもそこのところはしっかりやっていくということを目標にして頑張っているところですので、またご批判いただきたいと思います。

○安　田：　ちょっと時間がなくなってきたので、もうお一方、あちらの女性の方、お願いします。

○女性Ｂ（中央区）：　先日、住基ネットの支援のことで上田市長にお願いした者なのですが、一つ意見とお願いがあります。

私は円山の中で小さい喫茶店をやっています。そのときに私は、皆さんの意見を聞いたり、できるだけワークショップとかにも出たりしていますが、こういう言い方は反感持つかもしれませんけれども、本当にレベルが低いと思います。私の店では、ゼロ歳から90代までの、若い方から中高年、グルメでランチタイムにワアワア行くようなおば様も

いれば、今までのしがらみの中でいるおじ様たち、建築家から通訳なさる方とか海外に向けて行っている方とか若い方もいますが、もうこういうレベルじゃなく、政治・経済、本音でいろんなことを話します。

だから皆さん自分の関係していること、例えば教育だったら教育、福祉だったら福祉、労働だったら労働だけのことしか言わないのですよ。これは行政と毎日の生活というのは、本当に密着しています。自分の年金がどういうふうに動かされているか。あと北海道の一番の宝物である緑が、皆さん多いと言っていますが、深さはなく、逆に東京の中央の方があります。ですから、ここは開発の北海道ですから、皆さん自然に対しての感じ方が物すごく浅いのです。だから逆に、道外から見えている若者たちが、無農薬のお米をつくったり、野菜をつくったり、自然にかかわる写真家になったり。別に北海道の人たちが全部マイナスというわけではないのですが、雪とか何かをマイナスにしかとらえていないのです。自分たちが選んで住んでいるのですから、自分たちが生きている30年間とか50年間の問題ではなくて、いい人間を形成するとかいいまちをつくるというのは、そんな年数でできません。100単位とか、もっとそれ以上のことで自分たちが若い人たちのために、税金を少なくして何を残すかということがまず一番です。円山公園だって、ＪＲタワーとかテレビ塔から見て、自然がいっぱいだと話しているのは、本当に残念です。今の大通も全部悪いわけではないですけれども。

そこで思うのは、札幌市、行政の側も私たちも意識をちゃんと改革していかなければいけないということだと思います。例えば、行政の方がいろんなことを企画します。でも、それは机上であって、いろんな選挙の根回しでススキノにみんな出かけるのではなくて、自分たちのまちがどういう形成をしているかということを、山でもなんでも登って日常の人たちじゃない人たちと接して、本当に自分たちのまちがどういうまちなのか見てほしいです。こんな大事なまちなのに、拡幅工事とか目先の経営だけでは、これからもずっと経済はとまります。札幌は今のままだったら何もよくないですよ。皆さんレベルが低過ぎます。もっと大きく外から見た札幌市、みんなは何を望んでいるかというのは、そんなに甘っちょろいものじゃないです。思いが感じられないのですよ。以上。

○安　田：　これは私たち市民、皆さんで受けなければならないですよね。

○女性Ｂ（中央区）：　知識ある方とかがきちんとリーダーシップをとって、本当に自分たちのまちがどうなのか、自分の企業から見るのではなくて、地面に住んでいるような、そういうところの視点からもって……。

○安　田：　今の方のご意見、私たちみんなで受けるというのはどうですか。多分、この会場の中には市の方もいらっしゃると思うのです。市長もいますし、先生や鶴羽さんもいます。

○女性Ａ（南区）：　前段の話が長過ぎます。市長さんとみんなで話をするチャンスをいっぱいつくってください。

○安　田：　これは今始まったばかりのスタートの企画です。今回はこういう形で開きました。でも多分、皆さんのご意見を伺って、次は違う形になると思うのです。今までこういうこともほとんど開かれていなかったですよね。

○女性Ａ（南区）：　時間がないですもの。私たちがうんと聞ける時間をふやしてください。

○鶴　羽：　タウントークとこの座談会は趣旨は違いますか。

○安　田：　いや、一緒です。

○上　田：　ですから、おっしゃることはよくわかりますので、なるべく多くの方に発言をしていただく時間をたくさんとるというのは、これは大変大切だと思います。

○安　田：　そろそろ時間が過ぎているのですが、あと10分ほどいいそうです。

今お手を挙げていらっしゃる方が５人ほどいらっしゃいました。

１人２分で、一番奥の方からお願いします。

○男性Ｅ（白石区）：　手短に言います。市長にお伺いしたいのですが、札幌市というのは、国際都市

としてオリンピックとワールドカップを唯一日本で行っている都市だと思うのですけれども、2008年の国連サミット開催誘致に向けて、回ってくれば立候補したいと新聞等で発言されたと思いますが、ほかの都市と比べてどういった部分で競い合っていくのか、どこを世界から見てアピールされていくのかという、３年後、４年後ですけれども、この辺も本気で考えていらっしゃるのかを知りたかったものですから、短い答え方で結構ですので、教えてください。

○上　田：　今サミットの開かれる世界のいろんなまちを見ていますと、札幌というまちの形態に該当するかどうかは、なかなかラインがちょっと違うかなという感じがして、少し厳しい見方をしています。これは札幌だけが手を挙げるのではなく、やるなら本当に北海道一緒になって引っ張らなければなりませんが、歴史のある古いまちというのがコンセプトで世界ではサミットをやっているようです。札幌がそのラインに乗れるかどうか、それから警備の問題だとかいろいろあって、難しい条件はかなりあるだろうと感想としては持っております。

○安　田：　よろしいですか。今度は向こうの女性の方、お願いします。

○女性Ｃ（西区）：　先ほどの女性の方がおっしゃっていましたが、私も大変共感しております。今日は宮脇先生がおいでになるということで、楽しみにしていました。と申しますのは、先日塗装業界の方々と色や町並みについてお話しなさったように新聞で拝見したのですが、私も町並みについては大変興味を持っていまして、そごうが元気なときに、私はそごうの一番てっぺんの方の喫茶店から、西武デパート、五番館デパートがレンガ造りになるのを楽しみに何回も何回も見ていたということでして、やはり北海道には緑とレンガが似合い、それはとてもすばらしいと思っております。そういう意味では自然と都市機能の調和ということはとても大切ではないかなと思っております。そういった点で、先ほど道庁の話も出ておりましたが、まさに札幌のまちづくりにふさわしいのではないかと思っておりますので、形から入るということも大切だと思っております。

また、先ほど雇用の問題をおっしゃっていましたが、私も職業相談でずっとやっていましたから、その気持ちは一番わかっています。それから子育てに対する教育の問題、これも一番よくわかっています。ですが、そういった問題はまた次の段階にいたしまして、今日は総論的にやっぱりまちづくりということで、色彩、形について、また質感ということもぜひ取り上げていただきたいなと思っております。それこそ札幌のまちづくりにふさわしく、そしてまた遠来のお客様たちがどんどん札幌を目指してくるよう、イベント等の形をとっていただきたいなと私は思っております。ですから、宮脇先生が専門の塗装業界の方々とお話ししたということ自体がすごいことだったと私は思っております。そういう分野別の方々をどうぞいっぱい集めてください。

○安　田：　宮脇先生にお伺いしてよろしいですか。今の色のお話。

○宮　脇：　色のお話はそのとおりだと思うのですが、やっぱりそういうことで札幌がほかの都市とどのように差別化できるか、ブランドを持てるかということが重要なことだと思うのです。都市化してもほかのところと同じようなことであれば、先ほど来雇用の問題もご指摘がありましたが、そういった企業が活動し雇用がそこで生まれてくるというのも、この時代になるといかに差別化できるかです。差別化ができなければ、規模の大きいところに吸われてしまうというのが現状ですから、やはりそういう戦略というのは、もう一体の問題だと思います。

○安　田：　ほかに手を挙げた若い方お願いします。

○男性Ｆ（中央区）：　一応市職員ですが、市長と話す機会がないので、今日来ました。僕からのお願いは、以前ＮＰＯ法人で犯罪被害者の会の話を聞きまして、その中で少年犯罪被害者、交通犯罪被害者の家族の方の悲惨な現状を知りました。正直、想像以上にひどいものだったので、元弁護士の上田

市長にお願いです。犯罪被害者の権利の拡大と資金援助の制度を早急につくってください。

あともう一つ、これは仕事上で知ったことなのですが、3歳の子供で視力の判定が難しく、今の制度ではお医者さんが診断書を書くことができずに、視覚障害の手帳がもらえないと困っている方がいます。正直、制度を変えることは僕にはできないので、どうにかならないでしょうか。お願いします。

○安　田：　市長、若手の職員から質問がありましたけれども。

○上　田：　犯罪被害者の問題については、これはサポートしていくということで大きな世論形成があると思いますし、今弁護士会でもそれは一生懸命取り組んでいるというのが現状です。そういう被害者を救済、支援するＮＰＯがいろいろありますので、そういう社会的なシステムをしっかりつくっていく。そして行政がどうサポートできるかについては、ちょっとまだ検討をしておりませんが、大きな社会の流れの中で、行政も関与するようになることはあり得ると思います。

それから、弱視の子供が小さ過ぎて診断書を書けないという問題については、これはどうするのでしょうね。判定の工夫をしていくしか方法はないと思いますが、どうして弱視だとわかったのでしょうか。よく見えないということで、その程度がわからないのかな。そうなのでしょうね。

複合的な障害だからね。わかりました。仕事のことは役所でやりましょうか。

○安　田：　ではそろそろお時間なので、最後にお一方、先ほどから手を挙げていらっしゃる方お願いします。

○男性Ｇ（厚別区）：　ＮＰＯのススキノ活性化の「アラ！あずましい会」の事務局長をやっています。私が非常に感心しているのは、毎日地下鉄に乗るのですが、ひばりが丘駅でいつも市の交通局の方が「おはようございます」、それから帰るときには「ありがとうございます」と言っていました。まちづくりとかハードの面のことは活性化のためにやるのですが、やっぱりヒューマンソフトというか、人とのつき合いというか言葉のコミュニケーション、皆さんもおっしゃっていた優しさとか、そういうものはやっぱり挨拶から出るのではないかと考えています。特に雪まつりのときに、我々ススキノでは氷まつりをやります。そのときドラム缶を半分に切りまして、木炭を入れてぼんぼん燃やすのです。そうすると、普通のぬくもりと違って、みんな寒いですから寄ってくるのですよ。全国から。そうすると、いろんな質問があって、外人も来ますけれども、やっぱり挨拶というかコミュニケーションが非常に大切だとつくづく感じているのです。それで私は、海外でも実験しているのですが、オアシスハイ運動というのをやっているのです。簡単に言いますと、オ、おはようございます。アはありがとうございます。シは失礼しました。スは好きです。ハイ、喜んで。これは海外に行くと皆さんご存じかと思うのですが、必ずエレベーターに乗るときでも「エクスキューズミー」とか「センキュー」という言葉を物すごく多く使っていますよね。これはぜひ観光をこれから目指すためにも、そういう明るい言葉が今の「元気ビジョン」のもとになると思うのです。経済も景気というけれども、気ですから、それはやっぱり言葉の力でもっと明るい挨拶、私どものマンションも小さいマンションですが、不思議なぐらい、みんな挨拶はすごくよくなっています。足元から挨拶運動を、これは金がかかりませんし、世界にも通用しますから。ぜひやっていただければありがたいと思っています。

以上です。

○安　田：　市長、そういうことです。

○上　田：　すばらしいアドバイスありがとうございます。

○安　田：　まだまだご質問なさりたい方はいっぱいいるかと思うのですが、この後、皆さんお帰りになっていろんなまちのことをお話しするのが一番ではないかと思うのですが、市長、最後にいかがでしょうか。

○上　田：　ありがとうございます。本当に十分な時間でなくてごめんなさい。また、今度はもっと、ここでコーディネーターがいて、皆さんの話をワッと聞くという感じの集会も工夫ができるかと

思います。そして、今日ここで本当にたまたまご一緒させていただいた皆さん方に、自分の居場所といいますか、ご家庭あるいは職場に帰られて、ぜひ一言二言、札幌はどうだったらいいかなと、明日の札幌をどうするかということをお話し合いになっていただければ、私はこの札幌をまだまだ快適にしていくことができる、そんな要素をたくさん持っているまちだと信じておりますし、そんな温かい関係をつくっていければうれしいなと思います。今日は本当にありがとうございました。（拍手）

○司　会：　座談者の皆様、会場の皆様、ありがとうございました。

本日予定しておりましたプログラムは、これですべて終了いたしました。

それでは、座談者の方々にいま一度大きな拍手をお送りいただき、この会を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

資　　料

・プログラム

・さっぽろまちづくりトーク参加応募に際し、寄せられた意見

プログラム

18:30　開会

市長からのメッセージ

『元気なさっぽろをつくろう！～そのための５つの基本目標～』

（舞台転換）

18:50　座談会

『「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」のまちづくり！』

■ 進行・座談者

安田　睦子氏（(有)インタラクション研究所代表）

■ 座談者

宮脇　淳氏（北海道大学大学院法学研究科教授）

■ 座談者

鶴羽　佳子氏（フリーキャスター）

■ 座談者

上田　文雄（札幌市長）

来場の方々との意見交換

20:30　閉会

まちづくりの５つの目標

○ 元気な経済が生まれ、安心して働ける街さっぽろ
○ 健やかに暮らせる共生の街さっぽろ
○ 世界に誇れる環境の街さっぽろ
○ 芸術・文化、スポーツを発信する街さっぽろ
○ ゆたかな心と創造性あふれる人を育む街さっぽろ

さっぽろまちづくりトーク参加応募に際し、寄せられた意見

◆**40代 女性**：欧米では大型のベビーカーでも街中で元気に移動しています。そんなことが当たり前な都市（まずは都心と都心への移動だけでも！）になるような計画（仕事）をして下さい。

◆**40代 男性**：3世代4世代の密接したコミュニティを望みます。また、転入される方が多い街ですから、地域ごとの街の特徴がもっと顕著になれば安住の地の選択がし易いと思います。

◆**20代 女性**：北大の研究生です。今は「札幌における外国人定住とまちづくり」について研究しています。今回の会議は自分の研究にとても役立つと思います。「札幌新まちづくり計画」についていろいろ調べましたら、札幌に滞在している外国人とまちづくりとはあまりつながらないような気がします。

今は札幌に滞在している外国人が8,566人だそうです。これからもっとふえると思われますが、札幌のまちづくりはその人たちとぜんぜん関係がないとはいえないでしょう。そういうところをもしこれからの「札幌新まちづくり計画」に付け加えたらもっといいじゃないかと思っています。

◆**女性**：膨大な財政赤字と深刻な雇用不安等をかかえる札幌市が、一日も早く、健全な財政と住みやすい札幌市を築くため、次の事項を要望します。

1.敬老パスの廃止について

昭和50年1月から開始されたこの事業について、私は、当時から札幌市の担当課に出向き、将来、大変なことになると訴えてきたが、現実となってしまいました。当時は高齢者の人口も少なかったので事業費も少なくて済んだが、現在は、人口が約4.4倍、事業費が27.5倍にも膨らんでおり、今年度は36億円に達し、今後も年2億円ずつ増加するとのことです。そして、この36億円を雇用に充当すると、年収500万円の人が720名分に相当するのです。それでなくても高齢者は医療費の負担が少ないのに若者は3割負担で、少子化が進行している世代の負担はあまりにも大きくなる様なことから、財政を圧迫している敬老パスは廃止すべきだと思います。

2.幹部職員の天下りの廃止について

札幌市が出資している団体を民間に委譲し、それにともなう幹部職員の天下りを廃止して雇用の場を拡げ、若い人材の育成にすべきと思います。また、国政においても、官僚の天下りの廃止が強く叫ばれているにもかかわらず、多額の退職金をもらっている札幌市の前市長が高給で札幌ドームの社長に納まっていることについて、一般市民としては開いた口が塞がりません。これは札幌市議会の重大な責任で、残念でなりません。

3.財政の健全化に向けて

札幌市の財政を悪化させたのは私達市民ではありません。歴代の市長及び市議会委員の方々による財政の取組が間違っていたからではないでしょうか。今こそ一人一人が真剣に現実を踏まえ、一致団結して努力すべきです。人間として一番大切なことは働く職場があること、家族が健康で仲良く生活できること等です。近年、若者の犯罪が増えておりますが、これは、学校の教育にも問題があると思いますが、一番重要なことは親の躾にあると思われますので、各地域ごとで研究すべきではないでしょうか。

◆**60代 男性**：札幌市は転勤族が多いと言われる、それも独身者が多いと。これは外国からの留学生が本当に勉学に集中できる環境が札幌市にどれだけ整備されているか、と同根の課題がある。引いては少子化社会からの脱却を意図する時同じ様な課題が解決されなければならない。これらは全て“子育てにやさしい環境が整備されていない”ために生じている困難である。子供達を連れて安心して赴任できない。住宅問題、保育園・幼稚園の安心出来る施設が少ない。

言葉の不自由な留学生には安心できる病院に罹るのが一苦労でありそのサポート体制も無い。これらは若い夫婦の家庭にとっても同じ悩みをもたらしている。この様な事は上辺だけの綺麗ごとや上滑りの言葉の羅列では何も生れない。市民の中に活力・活性化をもたらす為には何をすべきか、地道な課題の掘り起こしが求められるのではないだろうか。このトークショウは、それに役立つのであろうか、単にショウで終るならば、今までと何ら変

わらない期待はずれに終るであろう。少し辛口に…

◆30代 男性：新しい事業を起こそうと挑戦する市民です。「オフィスビルのコンバージョン」を提案します。日本でオフィスビルのコンバージョンが注目されるようになったのはここ１～２年のことです。これは以前から予測されていた「オフィスビルの2003年問題」との関係が深いのです。古くて空室の多いオフィスビルであっても住居としては魅力的な立地にある場合もあり都心居住のニーズが高まる中で　コンバージョンには大きな可能性があります。

冬の雪国では高齢者・障がい者が活気ある都心にアクセスしにくい状況がありますが、整備された都心部で暮らすことで豊かな生活をすることの手助けになると思います。「自立支援の促進、高齢者や障がいのある人が地域で自立した生活をおくることができるようにするため、街のバリアフリー化など安心のための公共事業を進めるとともに、今後はさらに心のバリアフリーが広がるよう努め、多様な社会参加や地域生活の支援の充実を図る。」この考えにもオフィスビルのコンバージョンは役立ちます。既存ビルを解体することなく活用して新たな価値を生み出すのです。解体に必要なエネルギーや資源を節約でき、環境にやさしい事業です。国土交通省でコンバージョンを進めていこうという動きがありますしコンバージョンビジネスは、これからの成長市場にあると考えます。

北海道では未だに景気が冷え込んでいるようです。しかし何かに投資したいと考えている投資家、何か新しいことを始めたいと考えているクリエイター、面白い住空間で暮らしたいと考えている人はいるはずです。あとは彼らに環境を提供することではないでしょうか。そんな彼らの動きを見た周囲も動き出すと考えています。最初のアクションと、それを１歩前に進める行動力が必要なのです。重要なのはそれを継続すること。20世紀はさまざまな新技術が開発され物質的に豊かな社会になったと思います。

21世紀をアートの時代として、地域のアーティスト、クリエイターにコンバージョンしたビルの１階又は１・２階スペース等を作品発表の場、活動の場として提供していきたいと考えています。それはアートが社会現象の推進力になると考えるからです。ニューヨークがその例だと思います。土地評価の方法、価値観が変化している時代に必要なのは知恵やアイディアです。価値が無いとされてきたオフィスビルに付加価値を与え収益を生みだしていくコンバージョン住宅は金融商品としても魅力的なものになると考えます。

その付加価値とはデザインです。ハードにかかる費用は理解されてもソフトの費用は理解されにくい状況があるかと思いますが、デザインという行為は実体経済にダイレクトにつながっています。建築的なデザインはもちろんのこと、資本の流れをデザインすること、考え方や物事の捉え方をデザインすることが重要です。よって、このプロジェクトには建築だけでなく、金融、不動産のプロの頭脳も必要であり最も重要な役割のひとつです。コンバージョンビジネスをPRするのにもモデルとなる事例を作ることも大事だと思います。自治体がコンバージョン費用の１部を負担している例もあります。街の景観や既存の建物を大切にしているヨーロッパで、コンバージョンはごく自然なことであると思いますが、資本主義の象徴のようなアメリカ、特にニューヨーク、シカゴの例は日本の今の状況に近いのではないでしょうか。

芸術や地域文化等のハード・ソフトの資産を観光資源として積極的に活用してデザイン産業を振興し、さっぽろブランドを発信。魅力あふれる地域づくりの推進。この考えに共感しますしぜひともそうしたいと考えます。芸術・文化の薫る街の実現、市民が、街のいたるところで、芸術・文化の楽しみを享受し、発信できる文化の薫るまちづくりを進めていく。誰もが気軽に参加できる身近な芸術・文化活動の振興。こんな「まちづくり」に強い関心がありますし、コンバージョンを行うことは上記の重点戦略に大変有効と考えます。「札幌元気基金」等、コンバージョンについて支援を希望します。

◆40代 男性：１.丘珠空港と地下鉄が接続するようにできないでしょうか。

２.地下鉄麻生駅とＪＲ新琴似駅を接続することができませんか。

３.新札幌駅のＪＲと地下鉄の乗り換えをスムーズにするようバリアフリー化ができないでしょうか。

４.地下鉄の改札を全部共通カードが利用できる

ように改善できないでしょうか。
　5．街中のバス停の位置を（行きと帰りの位置を）もう少し近づけることができないでしょうか。

◆40代 男性：まちづくりはハードではなく、もっとソフトの面を重視すべきです。道路をこれ以上造る必要はありません。車の利用を制限し、都心に入ってくる車の総量を規制する目標値を設定すべきです。

◆60代 男性：札幌新まちづくり計画市民会議が開かれました。現在、企画調整局が担当する関係の深い類似の会議には、緑を感じる街並み形成計画策定委員会や札幌市と都心まちづくり計画策定委員会があります。これらの３会議は、札幌市の財政状況との関係（地下鉄の財政を含めて）で論じる必要があります。市民は、財政との関係で、その計画を支持するか、変更を求めるかの判断を求められることになります。いずれの会議においても、財政との関係について踏み込んだ検討に至っていません。財政との関係を判りやすくとりまとめるよう要望します。
　また、札幌新まちづくり計画市民会議では、都心の位置づけと、他の２会議との関係を明確にすることをすすめてください。札幌新まちづくり計画市民会議での都心の位置づけによって都心の交通計画は様変わりすることになります。緑を感じる街並み形成計画策定も同様です。地下鉄の有効活用について特に踏み込んで欲しいと思います。すでに財政を投入しています。

◆30代 男性：「まちづくり」というテーマとは関連性が薄いかと思いますが、今の札幌は自動車が多すぎると思います。都心への自動車の乗り入れを制限するとともに、もっと人や自然、環境を重視したまちづくりを進めて欲しいと切に希望します。

◆50代 男性：まちづくりには、庶民の生活のいろいろな場面ごとに、「こうあったらいいな」という夢をできるだけ税金をかけず、知恵を搾り出して、少しでも実現するという姿勢が大切だと思います。
　公園とか生活道路などは、多少の補助金でも出して地元に自由な形で管理してもらうとか、少子化対策や高齢者対策には、再教育に多少の補助金を出して、リストラされたおじさんたちにも保父さんや介護者になってもらうとかして、失業者対策との一石二鳥を狙ったりとか、除雪は市民不満の第一位ですが、道路の下にトンネルを掘って、路上の雪をその中に落として路面には雪を残さないようにするとか、そしてその雪から夏には冷気を吸い出して冷房に使うとか…　それとも要所に取り出し口を作ってトラックで運び、石狩湾新港からゴムシートに包んで、タグボートにでも引かせて水不足に困っている地域に売って収入にするとか…。
　公共交通機関の主要な駅には必ずパークアンドライドのための駐車場を、民間駐車場と提携して設けるとか。バス停や電停の駅は、厚手のアクリル板で囲い、冬季間でも寒くないようにするとか(これは岩波新書「都市と交通」(岡　並木著)の受け売り。）などなど思い付きではいくらでもあるのですが、役所だけでなく市民も縦割りでお上依存が強いので、なかなか難しいですよね。

◆50代 男性：札幌市のまちづくりは、美しいまちにすることが大切だと思います。美しい町は観光客が増え、そこに住んでいる人も、町を誇りに思い大切にするようになります。観光客が増えると町は活性化します。観光客に優しい町にするためには移動交通機関の整備が必要です。
　また、バリアフリーやユニバーサルデザインの観点も不可欠です。みんなで美しいまちづくりをしましょう。古いものを大切にしながら、新しいものと共存するまちづくりを…。

◆60代 男性：１．都心へのマイカー乗り入れ規制。
　２．都心での超高層建築物の建設規制。
　３．都心に高架自動車道を作らない。

◆20代 女性：私は東京から引っ越してきたばかりですが、ごみの管理について市民・行政共に意識が低いという印象を受けました。例えば、ごみステーションには常にごみが積まれており、これはきれいなまちづくりを考える上で改善すべき問題だと思います。

◆40代 男性：インフラの整備とまちづくりの関係性がなかなか見えてきません。もっと分かりやすい広報が必要では。

◆60代 男性：創成川通りアンダーパス連続化については、交通の円滑化を第１として、市案を支持します。

◆男性：ぜひ、スポーツによる街づくりを推進してほしい。若者が活躍できる機会を多くつくるなど文化活動に力を入れてほしい。

◆50代 男性：「北海道の再生は教育から」の基本理念のもと教育改革を推進します。小中学生の金銭教育から高校生の経済・金融・年金教育を徹底し、あわせて市民教育の為のセミナー・講演・交流を通じての人作りを計り、地域・地区・そして札幌市の活性化により生き生き札幌町作りが出来るよう協働してまいります。

◆60代 男性：1963～1964年、科学技術庁長期在外研究員として、米国イリノイ大学大学院に留学中の見聞、米国人はもとより、いろいろな国からの留学生との出会い、その後の国内・海外訪問・調査による見聞や人的ネットワークを通じて得た知見をベースに、未来に向けての国際社会における日本の役割としては、「調整役」が最も相応しく、かつ、実現可能なものとの結論に達し、その方向で、北海道、そして、道都である札幌市の歴史を踏まえ、かつ、国内の何処のまちにも当てはまるような郷土づくりであってはいけないとの思いを強くしながら、それぞれ如何にあるべきかについて考察を続けてきた。

その結論を極端に言えば、世界を、いろいろな分野で動かす多くの人材を札幌から輩出することと、少なくても、将来に向けた国づくりを支えるためのまちづくりの日本におけるモデル都市を目指した、ソフト、ハードの両面から世界でもユニークで魅力的で真に文化都市に相応しいまちづくりを進め、世界にアピールすることといえるであろう。

◆30代 男性：１.10年後、50年後、100年後...と継続して行ける、より具体的な計画を策定していただきたい。

２.○○施設を造る、○○地区を再開発するといったような、従来型のハコモノだけに囚われないでいただきたい。

３.上田市長以外、市の職員の存在感が希薄な気がする。職員ももっと本気になって市民と交流すべきでは？　※“元気な札幌”とは一体、誰（何）が元気なのでしょうか？

◆40代 男性：これからの人口減少に見合ったまちづくりを考えなければならないと思います。生産年齢人口は日本で現在の8,600万人から50年後には5,400万人、札幌でも現在の130万人から80万人へと急激に減少するとのこと。働く人が４割も減るということは大変なことだと思いました。札幌市も本当にコンパクトにならないと立ち行かなくなるのでは、と思います。

◆40代 男性：新しい物を造るより今有るものの中で何を残すのかを考えるのが大切。

◆40代 女性：市長の公約の一つでした小学校区に一つの子育てプラザ設置について、これからの取り組み方の構想について。

◆40代 男性：住宅地の駐車禁止区域で夜間の違法駐車が多いように感じます。住宅戸数に応じた駐車場の確保が必要なのではないでしょうか？また、収集日の朝にゴミの散乱が目立ちます。カラスだとは思いますが、こちらももう少し対策が必要なのではないでしょうか？とりあえず、思いつくままに記載しました。的外れでしたら、すいません。

さっぽろまちづくりトーク
～新たなまちづくり計画の策定に向けて～
～開催の記録～
平成１６年１月発行
編集・発行　札幌市企画調整局企画部調整課
〒 060-8611　札幌市中央区北１条西２丁目
TEL 011-211-2206

市政等資料番号	01－C02－03－815
関係部局保存期間	１年